

# 「同志社大学ハルリス理學部」ヲ

山下正和

(大学工学部教授)

新島襄生誕一五〇年記念特集に原稿を求められた。軍艦教授所で数学を修め、アーモスト大学では地質学をはじめ自然科学を専攻した新島襄が熱意を燃やした同志社大学の理工学教育に關連して、いささか私見を述べてみたい。

今年同志社創立一七一年、さらには同志社理工学教育の源流であるハリス理化学校創立一〇三年にあたつてゐる。三年前にはハリス理化学校一〇〇周年記念の行事があり、一昨年には記念講演会、昨年の十一月にはハリスフォーラムも開催された。一八六五年、アメリカに渡つた新島は一八六七年にアーモスト大学に入学し、リベラルアーツとしての西洋古典を勉強するとともに、自然科学の単位を取得し、一八七〇年「Bachelor of Science (理学士)」の称号を得てゐる。

その後、一八七四年に帰国した新島は、官立とは異なつた目的、すなわちキリスト教主義に基づく人民のための高等教育機関設立に全精力をそそぎ、一八七五年に同志社英学校を開校し

た。しかし、新島の目的は単に英学校の設立ではなく、文系、理系を含めた総合大学としての同志社大学をつくることにあつた。それゆゑ、当時の同志社のカリキュラムに自然科学が相当取り入れられていたという。新島襄研究に詳しい工学部の未光力作教授によれば、明治時代に創立された日本の主な私立大学のほとんどはその前身が法律学校などの文系学校であり、理系の分野に重点を置いていた点で同志社は際立つていたことである。理学士新島襄の面目躍如である。

さて、一八九〇年(明治二十三年)に私学の理工学高等教育機関としてわが国では初めてのハリス理化学校が開校された。この年は新島襄がなくなつた年でもある。新島の熱意に共鳴したアメリカの実業家J・N・ハリスの総額一〇万ドルにおよぶ寄付を基にハリス理化学館が建設され、日本においてキリスト教の徳育を奨励し、最も善良なる理学の教育を授ける」を趣旨として運営された。ハリス理化学校は二年後の一八九二年にハリ

ス理科学校と名前を変え、化学および薬学を教授する機関として近代日本の理工学教育の第一線を担っていたが、残念なことに七年後の一八九七年に存続が不可能になり、廃校された。ところで、当時自分が目指す理科教育のために一〇万ドルという巨額の寄付を受けた新島襄の喜びは如何ばかりであつたらうか。彼は何の縁故もないアメリカ人ハリスの厚情に感謝し、次のような美しい日本文字で綴つた礼状をハリスに送つている。(ラーネットが英訳したとされている)

謹テ書ヲハリス老台ノ下ニ呈ス、陳者貴殿ニハ昨年来敝校ノ為ニ深く顧慮スル所アリ賜ヒ、続々巨額ノ金ヲ寄付セラレテ、遂ニ拾万弗ノ多キニ達セシメラレタリキ、嗚呼貴殿ノ寄附ノ如キハ我カ東洋未曾有ノ美挙ニシテ、其ノ恩惠ハ真ニ我カ同胞ノ被<sup>レ</sup>ムルヘキニシテ、<sup>一</sup>「実ニ其恩惠ノ深サ高サハ」海山只ナラス、我カ同胞モ之ニヨリ永ク福利ヲ受クヘシト断言セサルベカラス。依テ吾人ハ慎ミテ貴殿ノ旨意ヲ奉戴シ、一大理学部ヲ設立シ、之ヲ同志社大学ハリス理学部<sup>一</sup>部ハ館ノ誤ニアラザル乎」ト称シ永ク後世ニ垂レ、貴殿ノ鴻徳ヲ明表シテ忘ル、事勿カラシメント欲ス、今回我カ同志社々員一同ヨリ特ニ謝辞ヲ呈スヘキ旨ヲ襄ニ托シタレハ、襄茲ニ一書ヲ認メ貴殿ノ好意ヲ鳴謝シ、併せて天父ノ限ナキ恩寵永ク貴殿ノ上ニ止ラン事ヲ祈ル、敬白

同志社長 總代

新島 襄

ハリス老台閣下

喜びと感謝のあまり、新島はこの中で、「我々はあなたのお考えを慎んでいただき、立派な理学部を設立し、これを同志社大学ハリス理学部と称して永く後生に伝え、あなたの偉大な行為を明らかにして忘れることのないようにしたい」と言つていたのである。

紙数も限られていたので、先を急ごう。

現在の同志社大学における理工学教育機関は工学部であり、その教育理念は当然、新島襄の同志社大学設立の旨意に添つたものである。またその沿革を語る時、つねにハリス理化学校を引き合いに出して歴史の重みを強調してきた。しかしながら、校祖新島が<sup>一</sup>大恩あるハリスに「ハリス理学部」をつくり、永く伝えると約束したにもかかわらず、現在の同志社大学にハリス理学部もハリス工学部もなく、ハリスの名は現在ではわずかにハリス理科学館として残るだけである。アメリカからはハリス理科学校が消滅した後も、第二次大戦中でさえ途切れずに現在もなお送金があるというのである。

当時ハリス理化学校の運営にあつた下村孝太郎は「同志社ハリス理化学校設立趣旨」の中でハリスの寄付に対し、「イギリスのスミソンが五十万ドルを寄付してきた、ワシントンにある世界的に有名なスミソニアン博物館と並ぶ天下の美談である」と書いている。新島にしてみればスミソニアン博物館のように、ハリスの名を表に掲げて永久に感謝と敬意を表したいと思つた事であろう。アメリカのマサチューセツツにいた新島は、ハーバード大学の名前が蔵書と財産を寄付した牧師J・ハ

「ボードを記念してつけられている事を当然知っていたであろうし、アメリカでは恩人の名をつけていつまでも記念する習慣が多い事も知っていたに違いないと思われる。それゆえに前述の礼状のような文章が出てきたのであろう。

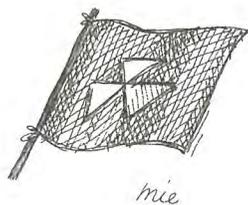
同志社の創立者が新島襄であり、同志社が新島精神を標榜していることは小学生でも知っていることである。当然、現在の同志社も新島の理念と意志を継いでいかねばならない。「ハルリス理學部」を永遠たらしめる努力をしなければならぬと思う。

もちろん学部の名前は文部省の管轄であり、同志社が勝手につけることはできない。また、学部名称変更を申請してもおそらくすぐには認められないであろう。そこで一つ提案をしてみた。それは、皆が差し支えないところで、「ハルリス理科学校」の名前を使うことである。例えば、学会誌に発表した英文論文の所属欄のところに「Department of Applied Chemistry, Harris Science School, Doshisha University (注 同志社大学工学部工業化学科のこと)」などと書くぐらいはできるであろう。それを見た人が興味をもってくれたらしめたものである。由来をしっかりと説明して宣伝してやればよい。非公式であってもハルリス理化学校の名前が徐々に知れわたっていくであろう。そのうちに既成事実ができていく。

現在の同志社は新島襄というかけがえのない校祖をもち、同志社工学部はハルリス理化学校というすばらしい歴史をもっている。歴史のない学校には喉から手が出るほど欲しいであろう歴史である。新島が夢み、ハリスが期待したハルリス理化学校は七

年しか存続しなかったが、その短い間には日本の科学界に大きなインパクトを与えた多くの人物をしっかりと輩出した。この歴史を培い、伝え、ぜひとも現在の同志社理工学教育を担っている工学部の伝統にまで昇華させたいものである。そのためには精神的中心である新島の恩を絶えず振り返らなければならぬ。その第一歩が「ハルリス理學部」であると思う。

田辺統合に伴い、ハルリス理科学館もまた工学部から離れようとしている今、「たかが名前ぐらい」と思うなかれ、一事が万事であろう。



# 寛容の精神は発揮されるか

—皇太子の結婚によせて—

田中真人

(大学人文科学研究所教授)

一九九三年一月一九日の皇室会議で、皇太子徳仁氏と小和田雅子さんとの婚姻が承認された。皇位継承順位第一位である皇族男子の婚姻は、明治以降で四回目、現憲法下では二回目である。前回の明仁氏と正田美智子嬢との婚姻を承認する皇室会議では、皇室の宗教が神道であることを前提として、美智子さんではキリスト教徒ではないことの確認の質問が議長である岸信介首相からなされるといことがあつたが、今回はさしたる異論や質疑もなく承認されたとのことである。

かくて三四年前の「ミッチーブーム」と同様の、あるいはそれ以上のご成婚フィーバーが繰り広げられつつある。しかし歴史は全く同じままでは繰り返さないという法則も、いくつかの局面で私たちは見せつけられてもいる。雅子さんが皇族との結婚を受諾すべきかをめぐって逡巡し悩んだことは、すでに周知の事実として喧伝されているが、「光栄」「名誉」という以外の表現は、ついこの前までは考えられなかつたはずである。また

折角のキャリアウーマンの道を放擲せざるをえなかつたのは「勿体ない」という、すでに世間に広まっている感覚も従来は表向きにははばかられるべきはずのものであつた。さすがにこの国のマスコミは「あの皇太子には勿体ない」という脈絡で報道するほどには進んではない様ではあるが。

一九五九年四月一〇日の明仁・美智子の結婚式の日、テレビ各社は総力をあげてこれを中継し、視聴者は推計一五〇〇万人に達したという。白黒テレビの普及率の飛躍的上昇のデータは、ミッチーブームの経済的波及効果の典型的例証としてしばしば指摘されるとおりだが、その中継放送の佳境ともいふべき結婚パレードの最中、皇居前でふたりの馬車に飛び乗ろうとして取り押えられた青年がいた。長野県出身のあの青年は、この国のすべての流れが「奉祝」に向かい、それ以外の発想がありえないかのような世論の圧倒的大勢に竿さし、抗するための請りのパフォーマンスをとつたものであらう。戦前であれば請

願令違反か、場合によっては大逆罪で死刑になりかねぬところだが、あの青年が起訴されたなら罪名は何だろう。威力業務妨害罪か、あるいは道路交通法違反か？ あの青年は不起訴に終った。精神薄弱を理由としてである。かつて田中正造が、足尾鉾毒問題を明治天皇に直訴したさいに、衆議院議員を辞職したばかりの義人田中を狂人扱いとすることによって不起訴とし、もってすべての「正常」な臣民は天皇への崇敬に満たされているという建前を維持せんとしたように。

田中正造の直訴事件が起こったのは一九〇一年二月九日の第一六議會開院式からの帰途においてであったが、その前年、一九〇〇年五月一〇日には、皇太子嘉仁(後の大正天皇)と公爵九条道孝の四女節子との結婚式が挙行された。明治以降初めての皇太子の結婚式であり、一八九七年の英照皇太后孝明天皇(后)の大喪に続く皇室に係する大きな慶弔行事として、明治末年にかけての天皇制国家における皇室儀式の整備をもたらし、いく画期をなすものである。

京都市岡崎にある京都市動物園は、この時の結婚を記念して開設されたもので、この時のご成婚フィーバーが京都市民に残したもののひとつである。近代天皇制が確立期を迎えて初の本格的な奉祝行事であるだけに、国をあげてというにふさわしい大キャンペーンが展開された。キリスト教界もその例外ではなく、各教会は競って奉祝祈禱会を企画し、結婚式の当日には平安女学院と同志社とは講堂にて奉賀の祈禱を奉り(『大阪朝日』一九〇〇年五月一〇日「京都の御慶事奉賀」)、キリスト教各派も、

仏教や教派神道各派に負けずに指定の書式で賀詞を送付し、『福音新報』『護教』『東京毎週新誌』などの各教派機関誌は奉祝社説を掲げた。

その奉祝気分も覚めやらぬ五月一二日、東京で刊行されていた小雑誌『青年之福音』に不敬罪が初めて適用され、執筆と刊行にあたっていた青年が逮捕、起訴されるという事件が起こった。皇族の結婚を愛なき人身御供とした「人生の大惨劇」なる論説が問題となったものである。執筆者守田文治が神田基督教会員であったこと、主筆山川均は二年前まで同志社学生であったことから、キリスト教攻撃の、ためにする議論の発生が予想され、その防戦のための過敏な論陣がキリスト教界から発せられることになる。

『青年之福音』てふ雑誌は、その主筆を山川均といひ曾て同志社に学へることあり、自ら称して基督教徒となせど何れの教会にも属し居らずとかいふ。五月二十日(ママー引用者)発行の第三号は不穩当の文字ありて、安寧秩序を妨害するものと認められ、発売頒布を禁じその印本を差押へられたり。右の記事は東宮の御慶事に関するものゝ如し。或る新聞紙は之を以て大不敬となし基督教徒を攻撃したり。(『福音新報』一九〇〇年五月一六日、第二五五号)

此事に関し、世には基督教徒の一部の機関の如く伝ふれども、こは全くの誤にて、記者が聞く所を以てすれば、山川は教会員にあらず、森田のみは神田福音教会会員なりとの

ことなるが、何れにせよ我国民中に斯る狂漢を見るは嘆すべき事なり（『東京毎週新誌』一九〇〇年五月一八日、第八七三号）

また『東京毎週新誌』は次の第八七四号（五月二五日）の社説「不敬事件」において、この事件を起こしたものは基督教界とは無縁であることを強調した。同誌同号にはキリスト教有力三派を代表する本多庸一（美以教念）・小崎弘道（日本組合基督教会）・植村正久（日本基督教会）三名連名の声明を転載されており、同じものがほぼ同じ頃に出た『福音新報』第二五六号にも転載されている。全文はつぎのとおり。

驚くべき大不敬の文字、雑誌『青年の福音』に現はれたり。其筆者及び関係人は現に審問せられつゝあれば事の真相を詳らかにして公明なる結局を見んこと遠きに非ざるべし。／＼世或ひは『青年の福音』を以て基督教徒の意志を代表せるものと速了するもの少からず。其如何なる性質の雑誌にて、其筆者は何人なるかを知らざるがため、窃に杞憂を抱くもの多かるべし。／＼余輩の聞知する所を以てすれば、『青年の福音』は基督教の何派何団体とも關係を有せず、毫も基督教を代表する如き性質を帯びざるなり。其の発行、編輯、印刷の責任ある署名者は籍を教会に有するものに非ず。其起草者として拘禁せられ居る山川均氏は未だ何れの教会に於ても洗礼を受しことなし、唯だ此の不祥なる文章を写

字せしと云う森田文治氏（丁年未滿の少年）が神田福音教会の一員なりと聞くを遺憾とす。／＼事實は斯の如きのみ。其の基督教の精神と相矛盾すること明らかなり。然るに此の不祥なる出来事を誤解し、基督教の精神に出ると看做すものあるは、皇室に忠良なる基督教徒の大に悲しむ所なり。

内村鑑三不敬事件（一八九一年）や田村直臣の日本の花嫁事件（一八九四年）の記憶も古いものではないこの頃、キリスト教が日本の国体と相反しない事の弁明を必要以上に行なわねばならない気になった事は理解できなくもない。三年前の「文部省訓令第一二号」を、アメリカンボードとの対立をおしてまでも受諾して、教育勅語の授業を正課に取り入れるなどを要件を満たして、ようやくにして徴兵猶予などの正規の学校としての特典を保持した同志社にとつて「同志社からも、学校の名誉のために彼（私）は決して我が校を卒業した校友ではないということ」を明らかにした、もつともな声明書が出されていた（『山川均自伝』）ことも自然かもしれぬ。キリスト教界はみずからに降りかかった火の粉を振り払う事で精一杯であった。ようやくにして確保してきたこの日本の社会におけるささやかな地歩を保守するためには、天皇制の不合理を指摘した青年の意を汲み上げる余裕はなかった。

確かにキリスト教徒は「皇室に忠良」であることが一般的であったかもしれないが、そうではない、あるいは一般に認知されているものとは違った形での「忠良」さを表現するものへの

寛容を示すこともキリスト教徒とキリスト教学園の大きな使命ではないか。「皇室に忠良」であることでは人後におちなかつた新島の寛容の精神がどう発揮されたか、見たいものであった。新島死後一〇年目の出来事である。

## 新島先生が同志社に託されたもの

有賀のゆり

(女子大学教授)

「新島襄」と敬称なしで呼ぶのが昨今の通例であるが、私には何か抵抗がある。「新島先生」というと心が落ち着くのである。まことに恐縮ではあるが、まず新島先生に関する私的な回想から本論を始めることをお許し願いたい。

私の両親はともに同志社の卒業生であったので、私は幼な頃から何となく「新島先生」という名を知っていた。「同志社は新島先生の理想教育、人格教育をする学校だから、他の学校とは違っている」と、母（大正十三年女子部普通科、昭和二年専門学校英文科卒）は誇らしげに語ってくれた。母の両親は、「同志社教育」に全幅の信頼をよせ、息子三人と母を含める娘四人を、

(附記) 山川均は同志社の卒業生ではないとの同志社の釈明的声明が発せられたということは、事件から半世紀後に執筆された『ある凡人の記録』（山川累積される語文書を集積する均自伝）に記述されるのみで、同志社側からは確認できていない。「同志社文書館」の整備を望みたい。

岐阜の小さな町からはるばる勉学のために京都に送つたのだつた。

私も当然のように小学校を卒えると同志社の高女部（現女子中学）に進学した。昭和十六年のことである。すでに軍国主義的な命令調で公立の小学校で教育を受けていた私は、同志社では生徒を「さん付け」で呼び、敬語を用いて一個の人格として遇することに驚き、救われたような気分になった。これが同志社の「人格教育」か、と直観したのが忘れられない。

早速習ったのが、新島先生の伝記だった。さし絵を沢山にもりこんだ小型の本を教科書に、教頭の末光信三先生が誠意と熱

をこめて語って下さった。まもなく太平洋戦争が始まったが、高女部では毎朝栄光館で礼拝が守られていた。

総長の牧野虎次先生は、礼拝で話をされる度に新島先生の話に及び、「同志社中学に入ったばかりの私も、新島先生のおひつぎの一端を担わせていただいて若王子の山を上り……」というところで涙で声をつまらせるのであった。あんなに涙が出るのがわかつているのなら、新島先生のことを話されなければよいのに、と思つたものである。

新島先生は同志社を創設して一八九〇年に永眠されるまで、同志社に在職されたのは十四年間に過ぎなかつた。しかし、その真摯な信仰に裏付けられた人格のインパクトは大きく、先生に直接教えを受けた先達から、さらに続く世代へと時代を経ても伝えられていることは感謝である。

生誕一五十年の今日、もし新島先生がよみがえり同志社の現状を見られたら、どんな感慨をもたれるだろうか。まず同志社が大きくなったことに驚かれるであろう。学生数は最初の八人の四千倍にも増大している。教育機関は幼稚園に始まり、四つの中学校と四つの高等学校、女子大学（短期大学部を含む）と大学の博士課程にまで及ぶ。大学には神・文・法・経・商・工の六学部があり、医学部を除けば、先生の当初の望みであった専門分野をほとんど網羅している。しかも「キリスト教を徳育の基本とする」と寄付行為の第二条に記したキリスト教主義の総合学園となつていたのである。

しかし、しばらく滞在してみると、「同志社は隆盛になるに

つれて機械的になる恐れがある。このことは十分にいましめるべきである」との言葉を再び声にされるのではないか。智育はよいが、自分が智育の源と考えた大切な「徳育」について、とくに大学レベルでは関心が薄いことを嘆かれるのではないだろうか。

今や同志社は、たしかに歴史と伝統を誇る私学として評価され、関西の名門校となつている。同志社内などの教育機関にも、難関を突破しなければ入ることは許されない。智的にも能力的にも、かなり水準の高い学生・生徒が日々学んでいる筈である。ところが大部分の学生は偏差値にもとづく受験指導によって同志社を選ぶのであつて、かつてのように同志社の創立理念、もしくはキリスト教主義教育に共感して来学する学生はきわめて少ない。毎日、田辺通学の途中に出合う学生の言動には他者への思いやりが乏しく、これが同志社の学生か、と情なく思うことも少なくない。

だからといって、私はこのような学生を非難するつもりはない。彼らは受験戦争によって、意識するとしなやかに拘らず心を傷つけられているのである。問題は教育機関である同志社が、このような若者たちをどのように受けとめ、どのような理念をもつて育て、社会に送り出していくか、ということである。

私は今こそ、新島先生の教育の理想が再評価されるべき時であると思う。あの明治維新後の日本の大転換期において、日本の政府が富国強兵のために西洋文明の果実を早急につみとることに汲々としていた時に、先生は西洋文明の根底にある、目に

見えない心の部分に目をとめられた。近代日本のために、ただ  
智識や技能に優れているだけでなく、神をおそれ、人を愛し、  
「良心の全身に充滿した」人物を育てることを願つてキリスト  
教主義の学園同志社を創設されたのである。しかもこの教育理  
念の実現は、百年では十分でなく、二百年を想定する遠大な計  
画であつた。

創立百十七年を経た一九九三年の今日、この高邁な理想は、  
現実との関わりにおいてどのような意味をもっているのであろ  
うか。歴史を再び振り返ると、軍国主義の道をまっしぐらに進ん  
だ日本は、太平洋戦争の敗北で一旦壊滅したが、持ち前の頑張  
り精神で驚異的な復興を遂げ、世界の経済大国の一つとなつた。  
しかし、その繁栄の大部分はアジアを含む貧しい国々や、弱い  
立場に置かれた人たちの犠牲の上に成立している。諸外国の日  
本に対する批判の目は厳しい。一見豊かに見える日本の中では、  
個々人は経済戦争を戦う企業の下に歯車と化してひたすら働き、  
そのひずみがストレスや過労死を生んでいる。科学や技術の進  
歩は人間に生活面での便利さを与えたが、一方で自然環境を破  
壊し、究極的には人間の生そのものも脅やかしつゝある。この  
ような深刻な問題をはらむ時代に、真の智性と良心を備え、「精  
神と活力にとんだ人物」が、日本のためだけでなく、地球社会  
の将来のためにもいかに必要であるかは明らかである。同志社  
はこのような人物を育て、世に送り出す使命を託されている。

そのために「キリスト教を徳育の基本」としているのである。  
私の所属する同志社女子大学の「徳育」は、毎朝の二十分間

の礼拝が基調になっていると考えられる。短かい時間であるが、  
田辺と今出川の二つに分かれたキャンパスで同時に、教員も学  
生もともに神の前に出て心を鎮め、新しい希望と生命を与えら  
れる貴重な時である。さらに春秋の宗教強調週間、リトリート、  
創立記念礼拝、クリスマス礼拝などには、特別講師をお招きし、  
時間も長くつて充実したプログラムをもっている。多忙な中  
をかかなりの数の先生がた（若い先生も含めて）が色々な形で協力  
して下さっている。これらの活動や行事に積極的に取組む学生  
は、二年間ないしは四年間の学生生活の中で、人間的に確実に  
成長して巣立っていく。

先日も宗教部の本年度の感謝会をもつたが、卒業していく学  
生が異口同音に、宗教部に関わつたお蔭で学科や専門を超えて  
色々な先生を知り、中広い友人ができたことを喜び、さらにこ  
れから厳しいと予想される世の中に出ていく心の支えができた  
ことを感謝する、と述べていた。そして卒業式までに、みんな  
と一緒に若王子山頂にある新島先生のお墓を訪れる予定です、  
というのを聞いて私は感激した。新島先生は、現在の学生にも  
人格的にかかわり、同志社の未来に向かつて基本的な指針を  
さし示されていることを、一人一人が自覚をもつて受けとめた  
いと願うものである。

# 新島先生の祈りと同志社

近藤十郎

(女子大学教授)

一、はじめに

……私は先ず神を理解しました。……次いで私はイエス・キリストが聖霊の御子であること、彼は全世界の罪の故に十字架につけられたこと、それ故私たちは彼を私たちの救い主と呼ぶなくてはならないことを悟りました。……私を創ったのはだれか？ 私の両親か？ そうではない、それは神だ。……そうであるなら私は神に感謝し、神を信じ、神に対して心の正しい人にならなくてはならないのだ。この時以来私の心は英語の聖書を読みたいという思いにみたされ、函館に行つて、イギリス人かアメリカ人の聖書の教師を得たいと決意したのです。そこで殿様と両親にむかつて函館に行かせてほしいとお願いしました。しかし彼らはとうていそんなことを許してくれません。むしろ私

のことを怪しんだくらいです。しかしながら私の固い決意は彼らの説論にくじけることなく、その思いを保ち続け、神に向かつて、どうかお願いですから、目的を達成させて下さい、とひたすら祈つておりました……

限られた紙面で冒頭にこのように長々と新島先生の言葉を引用したのには、それなりの根拠がある（「新島襄全集」第一〇巻、「脱国の理由」から。但し「……」の部分は筆者の都合で本文を省略した部分である）。わが同志社の *Reason & Faith*（存在理由）は、言うまでもなく、先生の篤き信仰と祈りであつた。創設の時から今日に至るまで、わが同志社の歴史を支え、発展に導いた原動力が、先生のキリスト教信仰に基づく祈りにあつた、ということを改めてここで確認しておきたいのである。

新島先生生誕一五〇年記念特集号としての『同志社時報』に、拙文を寄稿させて頂くにあたり、私なりにその内容をあれこれ

と考へてきた。その結果、この際もう一度、先生の「生涯」を丹念にたどり、彼が何をもつてその生涯の課題とし、かつ祈られたか、を確証検証することが、同志社に関わる者としての責任ではないか、と思はされたのである。同志社によつて育てられ、同志社をこよなく愛する人々が、現在の同志社を築いてきたことは、今さら言うまでもない。ここに寄稿される多くの人が、それぞれの立場で同志社の過去、現在、未来について、多くのことを語つてくださるであらう。私もその中の一人として特に新島先生の信仰と祈り、という点を取り上げる中で、同志社を語つてみたいと思ふ。

## 二、祈りの人、新島先生

先生の「生涯」を読む人は誰でも、彼のすべての働きの原動力が、祈りにあつたことを否定することはできないであらう。彼は事あるごとに祈つた。函館に行つてネイティヴ・スピーカーの聖書の教師を得るために、彼は祈つた。アメリカで教育を受けるためのスポンサーを得るために、彼は祈つた。日本にキリスト教主義の大学を、と訴へて基金を得るために彼は祈つた。同志社は、新島先生の私宅での、教師二名生徒六名によるいわゆる「涙の祈禱会」をもつて始まつた。同志社のすべての歴史の中に、祈りがあつたのである。この祈りの心、祈りの精神を風化させることは、すなわち同志社そのものを風化させることに繋がるということを、われわれは以て知るべしである。

それにつけても、日本的なあまりにも日本的な精神的宗教的

風土に育ちながら、先生が聖書の神に正しく出会い、その信仰を相応しく育てられたことは、十分驚きに値する。そのように神が彼を導かれた、としか言いようがない。しかも、彼は祈りの対象、祈るべき相手を的確に捉へていた。やみくもに自分の利己的な願ひを申し立てることは、誰にでもできるであらう。

「知られざる神」(使徒行伝一七・二三)への祈りは、空しい自己満足にすぎない。しかし、先生は祈りを捧げる相手を知つておられた。ラットランドにおけるアメリカン・ボードの年次大会で、日本にキリスト教主義の大学を建てるための基金を訴へるといったことは、常識的な意味ではまったく無謀な行爲であつたらう。彼のことを最も良く知つていた筈の恩師ハーディーさえ、積極的に彼の提案に賛成しなかつた。しかし、彼は祈つた。「私は神に祈りました。私はそのとき神と格闘したあわれなヤコブのような状態であつたのです……」(同書一八九ページ)。彼の祈りの真骨頂と言ふべきものである。神の聖旨に適ひさえすれば、その祈りは必ず聞かれるということが先生の信仰の確信であり、その祈りの結果が今日の同志社を産み出したのである。新島先生の迫力は、同世代の明治の志士たちと同様、儒教的、武士道の愛国心に基づくもの、といった誤解もないわけはない。聖書に出会う以前の先生には、確かにその一面があつたかもしれない。しかし、聖書の神に出会い、神への祈りを知つた先生と、それ以前の彼とは、決定的に断絶している。祈りというものは、そのようなものである。いわゆる「岩倉使節団」のためにワシントンに呼び出された際、先生が最も危惧

したことは、当時の他の留学生たちのように政府から資金面の援助を受けて、政府の「紐つき」になりはしないか、ということであった。彼は「キリストの自由な使者として祖国に帰る」(同書一三一ページ)ことのみを願っていたからである。政府の保護を受ける、ということはこの世的観点からすれば名譽この上ないこと、誇るべきことである筈である。しかし、先生の場合には異なっていた。神の聖旨以外に、誰にもどのような権威にも隷属することなく、信ずるところを「自由に」発想しこれを実行する、ということこそ、先生の願ひであり祈りに他ならなかつた。「私は自由人、キリストにあつて自由の人だからです」(同書、一三六ページ)とある。この「自由・自治」の精神が同志社の建学の精神の重要な柱の一つであることは、今さら言うまでもない。

### 三、同志社の未来のために

この段階で同志社の未来を語ることは、些か飛躍に過ぎるくらいがあるかもしれない。同志社が今置かれている現実を冷静に分析することなしに、いたずらに過去の歴史を挙げ列ねても、実質的な意味はもたない、という批判があるとするればそれは甘んじて受けるつもりである。創立以来一七周年を迎えた同志社。それを「発展の歴史」として手放しで肯定するには、少々抵抗感を覚える人もいるだろう。新島先生の祈りが、その後の同志社の歴史の中で、どの程度忠実に受け継がれてきたか。同

志社の「良心」は、どこに生かされてきたか。キリスト教教育を校是とする同志社が、校祖新島の信仰と祈りをどのようにに内実化し得ているか。——このような問いは、同志社人たるわれわれにとつて常に古くて新しい問いとして、問われてくるであろう。また、このような問いが真面目に問われなくなつてしまつたとしたら、その時は同志社は、残念ながら同志社たることを止めなければならない、と私は思う。

しかし、同時に、同志社の可能性は依然として無限である、と言いたい。いたずらに否定的消極的要素を列挙して、未来を閉ざして考えるのは、自虐的な自己満足にすぎないと心得ているからである。新島先生がその尊い志を建てられたその当初から、彼の祈りと願ひを妨げる内的外的要素は数多くあり、それ故に彼のこの世での生は、あまりにも短く閉じられたのである。しかし、先生の辞書には「絶望」という単語はどこを探しても見いだされなかつた。祈りの確信が、すべての困難を克服してあまりあつたからである。これからの同志社の未来に、この種の「祈り」を求めることは意味のない絵空事であろうか。

# 国際学校としての「同志社」

武 邦 保  
(女子大学教授)

一

同志社という一つの精神と科学技術養成の結社は、その淵源を「神戸」の明治初期に見れる、という視座に私は今も魅せられている。

これを解くことは、孤独なイメージに花を咲かせた同志社学園という総合的な舞台で活躍するであろう人々にまで必ず益する、と信じている。いわば一つの「原点志向」なのである。

日本の近代プロテスタント・キリスト教史を一般的に眺めた場合、札幌バンド（内村鑑三らにみられるクラーク博士の宣教）、横浜バンド（植村正久らにみられるヘボン、ブラウン師らの宣教）、そして熊本バンド（海老名弾正らにみられる新島襄とアメリカン・ボードの宣教）といった三つの源流を一八六〇年以降の波としてとらえている。

しかし、同志社という学園史をキリスト教宣教の脈絡でとらえたとき、どうしても今一つのバンド＝「社会的な宣教運動の流れ」を神戸を拠点にした動きとして、私はとらえておきたい。ひるがえって、今日も「神戸」は六甲の山脈と湊川の河口の東西に伸びる海外線にはさまれた大きくない地帯である。しかし、それゆえに飛躍のエネルギーを広く求めた日本第二の国際港都市といって過言ではない。

さて、一八七四年（明治七年）のアメリカはヴァーモント州ラットランドのグレイス会衆教会で、一人の日本人青年牧師が叫んでいた。それをオーテス・ケリー氏の著述した一文「ラットランドにおける新島襄」（『同志社百年史・通史編一』第一章）から読んでみよう。

それは一〇年に及ぶアメリカ滞在を終えて日本へ「宣教と教育」の使命をおびて帰国せんとする新島襄の告別スピーチでもあった。そしてこれをスクープした新聞報道（ラットランド・ウ

イークリー・ヘラルド)は伝えている。―「(前略)、日本のような国では悪魔ははやばやと種子をまくのです。ですから私たちは悪魔をだしぬいて、福音の種子をまかなくてはなりません。

神戸の教会は教育機関がありません。その教会には何らかの学校が必要です。日本人にとって金をねだるほどいやらしいことはありません。しかし……」とある。

神戸には、新島襄の云う通り、その四年前から彼の学んだ神学校の先輩(ダニエル・C・グリーン)が、若いカッパルで居留地内(第一八番)の建物(フリーメーソン・レンガ工職人中心の神秘的な祈り共同体、イギリスから起こった脱教会的集団が使用している集会所)にて礼拝を始めている。

ここには、すでにイギリス人のほか、アメリカ、ドイツ、オランダからの領事や商社員とその家族など二十数名が集まって、超教派的なユニオン・チャーチとして、その年五月末の日曜日から集会をくり返している。そして、翌年からは、O・H・ギューリックやジェロームD・デイヴィス(この人が新島の親友となり、会津藩出身の山本寛馬と三人で同志社の結社に踏み切る)。またさらにその翌年(七二年)からは、ベリー、ゴルドン、アッキンソン……と南北戦争後の開拓者精神にみちて医師や社会科学、聖書学などの知的才能を秘めた宣教師たちが、神戸に結集していた。

このような新しい神戸での働きを、彼らが皆、あのラットランドの新島と同じ海外宣教団(アメリカン・ボード)の先輩たちであったとすれば、彼が知らされないであったはずはない。

## 二

さて、かのデイヴィスは神戸でその「学校」をつくり始めていた。これが一八七二年一月一日開校の「宇治野英語学校」(宇治野村英学校―『近代日本と神戸教会』と呼ばれるものであった)。

キリスト教が明治政府によって、その禁教を解かれるのが一八七三年(明治六年)であるから、まさに禁を犯して集まってきた邦人青年たちをそこに見る。この人々の中から幕禁を破って海外飛躍した新島の門弟が現れても不思議ではない。彼らは後の松山高吉(関貫三)、キリスト教弾圧の謀者、神道系の人、前田陽一、岡田実といった青年で、グリーンに許して七二年の二月頃から私的に英語聖書の研究をはじめていた。彼ら有志八名が出資をして集会所を宇治野村(中央区下山手通九丁目)の借家に求めグリーン、デイヴィスらと青年たちの砦をつくっていた。

また、グリーンが聖書や他の洋書、新聞雑誌(海外版)を販売するために開いた店(元町五丁目、一八七三年)の翌年から始めた日本人向け礼拝は、四月一九日(七四年)十一名の受洗者を生み、正式にキリスト教会(攝津第一公会、現・日本基督教団神戸教会)を創立している。そこでも、グリーンが洗礼を施し、デイヴィスが説教をなし、前田(福沢諭吉門弟で、三田藩の人)が聖餐式への導入役、松山が洗礼(バプテスマ)式を不審に思う多くの聴衆にその解説をした(彼ら二人とも受洗)という協力体制

ができていた。彼らは皆、新しい精神と知識に旧来の日本の体制から解放される喜びを感じて、危険を承知で働いたであろう。

それまでの一時期、彼らは、日曜日は礼拝場、他は英語学校で顔をあわせ、折り合い、働き字んでいた。しかし、「切支丹禁制」の高札撤去（七三年二月）以来、宣教師たちは学校より宣教の場を求める傾向強く、その学校も閉じられる（同年一〇月）が、元町の「教会」設立後、グリーンは松山を伴って他の宣教師たちの招きで横浜へ、「聖書」の邦語翻訳と出版事業のため移り、デイヴィスも新しい道を求めていた。折しも、グリーンが招いていた女性宣教師（タルカットら）が「神戸女学院」（七四年一〇月）創立への動きをしていたこともあって、新島襄帰国（七四年一月）後、彼の招きで翌年、家族を伴って京都へ移った。同志社英学校設立への胎動が始まった。

一方、あの宇治野村の英学校は、改組されて神戸基督教青年会（YMCA）となってゆく（「神戸とYMCA百年」第一、二章）。

このように見てくると、神戸に落ちた「一粒のからし種」が、アメリカ・ピューリタンの伝統を受けた会衆派の民主政治的運営の教会に指導、協力されながら、神戸から京都へと教育・宣教の戦線を伸長させてきたことがわかる。

新島は大阪に学校設立を望んだが、消極的な渡辺昇知事にはばまれて、京都へ旅立ったという。神戸（兵庫）には全国的開港につくした柴田日向守や伊藤博文、オランダ通の開成所教授・神田孝平（アーモスト大留学中に受洗、英語学者、東京YMCA設立

者の一人乃武の父）という国際理解と近代化促進の首長がいた。

しかし、宣教師たちの事情もあり、新島も帰国後、一時そこに寄宿していたが、相前後して京都へ落ちついた。それは一つには、彼のモットーである「独立」を勝ち得たかったのである。有名な一八九〇年冬、新島襄を天国に送った時、のほりの一つに「自由教育、自治教会、両者併行、邦家萬歳」とあったが、これが京都に開いた、今後も、そこを拠点に展開しつづける同志社の目標であり、行政哲学であり、実践であるはずである。

立命館大学、京都大学など周辺に見る学園の国際的貢献への体制を、神戸に置かれた以上の価値をもって、今何かをなすべきである。



# しなやかで、したたかな将来像を

加賀 裕 郎

(女子大学助教授)

新島襄の遺言に「同志社は隆なるニ従ひ機械的ニ流るゝ恐れあり切に之を戒慎す可き事」とある。大学・女子大に限っても、現在二万五千名前後の学生が学んでいるから、教の上から同志社は隆なる状態にあると言えよう。が現今の大学改革を煽りて「てられている時世、改革に明け暮れた挙げ句、「機械的に流るゝ」可能性無しとはいえない。もちろんこの危険性は誰しも承知であるから、改革にあたっては自らの同一性の基盤である建学の理念を強調することになる。しかしそこにも危険性が潜んでいる。つまり、建学の理念は定義上古いものであるから、それを強調すればするほど、現代の社会や学生の要求から乗離して、一人よがりになる。逆に本腰を入れて、社会や学生の要求を入れようとすると、建学の理念が失われたと嘆くことになる。しかし明治期以来の私学の歴史を振り返ってみよう。私学の本領は人々の要求に敏感に反応して生き抜く逞しさ、したたかさにあつたと言ふべきであろう。建学の理念も時代の方向を鋭敏に

キャッチしつつ、その方向に適合した形で生かしていけばよい。さて厳しい時代をしたたかに生き抜くために、新島の教育理念と関連した現状をしたたかに生き抜くために、新島の教育理念は、「同志社大学校設立旨趣」などに比較的明瞭に表れている。別の所でも、新島は「教育の真の目的は何か」と自ら問い、「一面的教養ではなく、我々の諸能力の十全で、均整のとれた発達」であると答え、さらに自分の学識を同胞の善のためを使うことのできる強く、気高い品性を持つ人物の育成だと続けている。(Life and Letters) この教育目的を実現するために新島の念頭にあつたのが、アーモスト風のリベラル・エデュケーションであつたことは間違いない。しかし同志社の現状はそれとは程遠い。「リベラル・アーツの大学」と学則で規定している女子大学でも然りである。それはなぜだろうか。リベラル・アーツカレッジの目的は本来、学問を通して世界の意味をトータルに認識し、それによって人格を高めるところ

にある。この場合、学問は世界の意味を表す統一的全体であつて、諸学はこの全体の有機的部分である。また学問教育は人格の形成という倫理的なものと結び付けられる。そのため十九世紀を通じて、アメリカの大学では四年次に道德哲学(主に学長の担当と称する、学生の学識を統合し、さらにそれを人間としての生き方と結び付けるコースが必修として設けられていた。

しかしこうした教育理念は、十九世紀後半以降の総合大学の登場によって変容する。総合大学は学問の科学化・専門化と密接な関連をもち、次ぎのような変化を大学にもたらした。

一つは学問が統一的全体から自律的な諸学科へと解体し、それとともに大学はばらばらな諸学科の寄り合い所帯になったことである。もう一つは専門分化した諸学科での教育からは、かつての人格の向上という倫理的な面が失われたことである。専門的諸学科の教育は、専門人の育成だけに責任を負えばよく、人間教育の面にかかわる必要がない。ロバート・ペラーらが、古い大学における教育された人間モデルを「学識ある人」、総合大学型のそれを「科学者」としたうえで、後者の代償は社会の一般的市民としての義務を失った点にあると述べているのは、以上の意味においてである。(ペラー他「心の習慣」)

戦後の一般教育の導入は、この欠陥を補うためのものであつたが、専門分化の潮流、戦前の大学以来の伝統などが相俟つて、劣悪な教育的条件下での雑多な知識の教授の場になつてしまつた。リベラル・エデュケーションを通しての人格の向上という、新島の教育理念を支える客観的基盤は、二十世紀を通じて失わ

れてきたのである。

さてもう一つ、新島の教育理念と深く結びついたキリスト教主義に関する現状を見てみよう。新島は、「教育ノ基本ハ宗教ニアリト謂フ可シ」とか「教育ト宗教ノ関係、実ニ一ナル所ヨリ然ラシム」とかと述べたように、宗教と教育を一体のものとして捉えていた。おそらく新島の念頭には、学問を通しての人格の統合的向上の頂点に、またその過程を支える根源的基盤として、宗教を置くことがあつたらう。これは教育的に整合的な見解である。しかしこの見解を支える客観情勢もまた失われてきた。一つは前述した大学の総合大学化、専門化である。

専門教育は、その専門の枠内での能力向上だけに責任を負うから、リベラル・エデュケーションにおけるように深い学識と宗教が整合的に結びつかず、専門的知識に宗教が外的に接合することになる。その接合の具合がよくない。もう一つは学生気質の変化である。現在の同志社は、初期のそれのような一体性をもたず、多様な興味、目的を抱いた学生が、個人的な目的を達成するための手段として、ある程度偶然的に在籍している場である。こうした学生に初期のような宗教教育を貫くのは難しい。

以上、同志社の理念に関わる二つの点について、その現状を考えてみた。現状は同志社の教育理念に関して、種々の困難を示唆する。では現状で良いのか。私はそれは考えていない。第一に現在の専門分化の傾向、教育と人格形成の乗離の傾向は明らかに行きすぎである。戦後日本の「理念なき効率主義」の風

潮を大学はもう助長すべきでない。「教養でございませう」と言ってお高くとまっていられる時代は最早過ぎたのだから、専門化は避けがたく、学生の実用志向にもある程度応えざるを得まい。しかし今後の大学に必要なのは、一層の統合であり、専門化の代償として失った「社会の一般的市民としての義務」の復権である。そのために大学は、今後予想される生涯学習、リカレント教育の時代を展望しつつ、学校体系の頂点として学生を専門の袋小路に追ひ込むよりも、大学以後の人生への起点となる教育、もっと言えば専門の核を持ちながらも絶えずその視野を広げ、統合への目を育てる教育をすべきである。狭義の専門教育は大学院を拡充・再組織して、独立的・総合的大学院で行なうようにする。学部教育について、今少し具体的に言えば、現在の大学・女子大学という区分を再組織して、各々が特色をもつ幾つかのカレッジ群、いわば同志社大学群とする。各カレッジは社会科学であれ、自然科学であれ、女子教育であれ、一定の強調点を持ちながら、各々統合への目を育てるカリキュラムを編成するとともに、一定のプログラムを他のカレッジに提供するなり、他のカレッジ学生を受け入れるなりし、また教員も相互乗り入れ的に各カレッジと交流する。これによって、各カレッジは自治と連携、専門化と統合を両立させられる。

次に宗教教育について言えば、私見では宗教と教育の根底が同一であるという見解は、依然として正しいが、その解釈が問題である。端的に言えば、宗教教育を宗教を主、教育を従とし、「キリスト教を学生に教える」と解するのではなく、その逆

のほうが良い。つまり教育が人間形成への助成の営みである以上、学生が宗教的なもの、無限なものに触れることには、重要な教育的価値があると考えるのである。宗教教育の目標も「キリスト者である企業家、教育者……の育成」よりも「キリスト教を通して宗教的なものに目覚めた市民」の育成におく。人生は長い。学生はその後の人生の中で、宗教的なものと向きあう時がきつとやつてくる。そのための種子を大学で播くのである。ではどうすべきか。

そこでまず、学問の教育と宗教教育が独立した二つのものだという誤解を解かねばならない。宗教教育という観点からは、すべての教育が宗教と関わる。それは何も講義の最初にお祈りをするといった特別なことではなく、学生の視野を絶えず広げるようなカリキュラムを編成するとか、クラブ、行事、諸施設の共有、国際交流等を通じて連帯の精神を育むことも大切である。これらをベースにキリスト教を理解する場を提供するのである。広い視野、連帯の精神、宗教理解の三つから宗教教育を行なうようにする。

以上二点に絞って同志社の現状と将来を考えてみた。しなやかでしたたかななかに、新島の精神は生き続けると思うのである。

# 「競育」から「共育」へ

木村良己

(高等学校教諭)

(1) Freedom is my living motto .

新島先生は一八六四年、いまだ封建制から解放されない日本から、真の自由を求めて脱出しました。時に二一歳、今日で言う大学生の世代です。そして自由を体得して帰国後の一八七五年、この日本に自由の拠点―同志社を開設しました。時に三二歳。その後、はるかに想像を越える苦勞と自由への闘いの後、一八九〇年「同志社は隆なるに従い機械的に流るるの恐れあり、切に之を戒慎すべき事」などを始めとする遺言を残してこの世を後にしました。時に四七歳。

私達は、自らの年齢を新島先生の年齢に重ね合わせる中で、自らの継承すべき多くの事柄を学びます。三十七歳でいわゆる「自責の杖事件」を通して示した限りない愛情と教育に賭ける情熱的なパワーを思う時、三七歳も終わりがけの自分に、それだけ

の愛情とパワーが今も沸々と湧いているか、との問いが心の中で響き続けています。

自由を得ると言うこと、それは黙っていれば知らず知らずの内に与えられるものではありません。まず、自分自身の不自由さを知ることから始まり、自由を得るための何らかの代償を必要とするものです。新島先生の場合、自由との出会いは一冊の漢訳聖書であったと言われます。香港で武士としての証である脇ざし―小刀を八元で船長に売り、その金で漢訳の新約聖書を手に入れたと言われます。

日本の誇り高い武士としてのシンボルである「ちよんまげ」をすでに切っていた新島先生にとって、小刀の売却は、武士としての最後の証を手放すという代償を伴ったものでありました。こうして、武士にとつての大きな代償を払って手に入れた漢訳の新約聖書を熱読し、自由を学び、一歩づつ同志社の根幹となるキリスト教の真理を身につけていったのです。

「競育」から「共育」へ

武士のシンボル「小刀」を引き換えに手に入れた漢訳聖書による自由、そして年齢を重ねた一人の農夫と一人の女性の二ドルに始まった同志社の原点こそ、忘れてはならない、譲ることの出来ない大切な視点・こだわりであると思います。

## (二) 価値の視点×存在の視点

昨年十一月、ベトナムから結合二重体児の一人、ドクちゃん  
が義足交換のため来日し、京都にもその元気な姿を見せてくれました。ベトナム戦争中、生い茂った密林を枯らして丸裸にし、ベトナム掃討作戦を容易にする目的で、枯葉剤を大量に散布する「枯葉作戦」が一〇年間続き、その枯葉剤に含まれるダイオキシンが原因と見られる出産異常が続き、そのほんの一例として「ベトちゃん・ドクちゃん」がマスコミで取り上げられました。その「ベトちゃん・ドクちゃん」と、ひとまとめに呼ばれていた二人が、一九八八年、一六時間に及ぶ分離手術に耐えて、「ベトちゃん」と「ドクちゃん」に分かれ、生まれて初めて別々のベツトに入りました。分離手術は人々の注目を浴びました。成功か失敗かという事もさることながら、どう分離されるかという注目に集まりました。なぜなら、当時「ドクちゃん」は元気そのものでしたが、「ベトちゃん」は脳障害を起こして寝たきりの状態が続き、それほど長くは生きられないだろうとの予測がなされていたからです。

この世的に見れば、「ベトちゃん」は寝たきり、「ドクちゃん」

は元気そのもの。「どちらが役に立つだろうか？」というこの世間的な「価値の視点」に心が動きました。すなわち、「ベトちゃん」「ドクちゃん」に手は四本ありましたから、二本づつ分けられました。そして、足は二本です。しかし、ベトナムの選択は我々に大きな問いを投げかけました。二人に二本の足が与えられている。それなら二つの生命(いのち)に一本づつ分け与えられるのが「当り前」であると……。ある意味では「価値の視点」というようりも、「存在の視点」「生命(いのち)の視点」に立つことの大切さを問うた出来事と言えるのではないのでしょうか。

何年か後、成長と共に「ドクちゃん」の来日があるでしょう。「ドクちゃん」の来日は、「存在の視点」に立った教育を担っているかどうかを、私達に問いかける絶好の機会であると思います。そしてこの同志社が「存在の視点に立つ」という空気に満ち溢れているかどうかを問いかけるチャンスであると思います。

(三) 一年のはかりごとは穀を植えるにあり、一〇年のはかりごとは木を植えるにあり、一〇〇年のはかりごとは人を植えるにあり。(新島襄「教育宣言」より)

昨年の夏、学生時代から関わっているネパールワークキャンプの調査のため、一〇年ぶりにネパールの農村を訪ねました。かつてアメリカの開発援助によって、ジャングルが切り開かれ、多くの山岳民族が平地を求めて移住しました。広大な土地、豊かな大地、人々は豊かさを享受するかに思えました。しかし、

「ふんころがし」などの虫が人間の排せつ物を処理してくれるという自然のサイクルが崩れ、化学肥料の流入などによって土地は痩せ、「ふんころがし」も活躍の場を失い、人口の増加とあいまって、排せつ物が病原菌の温床となったのです。「大地に汗を流す日本の青年の協力が欲しい」との要請に答えて、ネパールの村と京都の諸協会の協力事業としてトイレ作りのワークキャンプが開始されました。そして同行したグループによって植樹も成されました。(現在もなお続けられ、今春一二回目のワークキャンプが同社社の学生を中心に派遣されています。)カネとちからによる「国際協力」という名の政府援助でジャングルを切り開いたため、木陰もなく、休む場所もなかったあの村に、小さなグループの「民際協力」で植えられた「イビルイビル」の木が、一〇年という年月の間に木陰を作り、人々に休息と安らぎを与えているのをこの体で感じてきました。

「一〇〇年かかって日本を変えよう！」と、良心を携えた人材育成のために教育の場を始めた新島先生の試みが、結果的に「一〇〇年かかって同社社が変わってしまった」なんてことはないだろうか。第二世紀の歩みの中でその事が問われています。

#### (四) 自由・奔放・好き勝手？

数年前、あるアンケートで「同社社精神とは何か？」との問いに「自由・奔放・好き勝手」と答えた学生がいました。自由の履き違いを皮肉った「名答」です。ある意味では、自由と

は思想・信条にとどまらない、人権に関わる事柄です。今日、私達が享受している自由が、多くの「宇宙船地球号」の仲間たちにシワヨセを与え、不自由を強いているとするならば、その自由の質を問い直す必要に迫られます。

新島先生は亡くなる二日前の一月二二日、遺言の中でこう述べています。「同社社においては、*個儻不羈*なる書生(要するに非常に個性が強くて、普通の尺度では計りがたい学生)を圧束せず、務めてその本性に従い之を順導し、以て天下の人物を養成すべき事」と。世の中が、みんな同じ考え、同じ格好を追い求め、人と違っていることを恐れ、違うものを排除しがちな今日、*又、「教育が競育、強育になつてゐる」と言われる時代に、この遺言は「軌道修正」を促します。そしてこの「違いを認めあい、シワヨセを受けているもの」と共に生きる」という精神は、同社社の共育において貫かれる原則であると同時に、「宇宙船地球号」で「自由・奔放・好き勝手」している日本という国の中で、同社社なりのあり方を貫き、人材を育成していく原則でもありましよう。*

# 立学の精神を貫徹するには

—教育は人なり—

喜 多 正 明

(香里中学校・高等学校教諭)

昭和四十年代に学園紛争の余波が本校にも押し寄せて来た。

本校にも全共闘が結成され「礼拝を廃止せよ」「讚美歌を歌うな」「キリスト教育の強制は信仰の自由を認めた日本国憲法に違反する」などのビラを撒いた。

当時の老朽化した木造講堂は夏は蒸し風呂、冬は冷凍庫で、礼拝に出席することは身体的苦痛を伴う状態であった。これは内容以前の問題であった。ゆえに生徒の一部にサボりたい気分が生まれていた。おりも折、校長が礼拝の奨励で「本校の礼拝は強制されて出席する礼拝ではなく、自ら進んで出席する自主礼拝にしたい」と言明した。

校長は礼拝出席の心構えを論したのであったが、生徒は「校長が礼拝出席の自由を認めた」と制度の問題として受け止めた。千名以上の生徒が参加すべき礼拝が最少時には五十名前後になった。礼拝再建が学校の緊急課題になった。キリスト教教育の推進を直接担当する聖書科や学校宗教部の教員の辛酸が始まっ

た。

聖書科の大橋寛政先生は「同志社のキリスト教教育と礼拝について」のパンフレットを作成され「同志社はキリスト教学園であり、教育のための礼拝を行っている。だから同志社の教職員生徒は個人の信仰いかんにかかわらず礼拝を守らなければならない」と訴えられた。

佐野昇先生は本校の教育研究誌第四号に「同志社香里における宗教教育について」の一文を記述され礼拝の意義を詳述された。

また学校宗教部は曜日を固定した学年別の礼拝を実施し、生徒の掌握に努めた。もちろん全教職員が礼拝の奨励や生徒管理に当たったことは言うまでもない。学校挙げての礼拝正常化への取り組みの努力は次第に生徒に影響を与えていった。

昭和五十年五月礼拝問題をテーマに開かれた生徒大会では「礼拝に出席して人生の糧を得たい」「礼拝出席を自由にせよと

言う者は礼拝をサボりたいからだ」などの意見が主流を占めた。昭和五十年度になって礼拝は再び軌道に乗ったと言えよう。本校は昭和四十年代の混乱を克服したことによって今日の安定したキリスト教教育が存在しているものと思う。

私は平成四年度一年限りの同志社評議員であった。同志社教職員組合連合推薦の評議員が任期途中で定年退職されたため、前回の選挙で次点であった私が繰り上げ当選になったからである。同志社評議員は同志社の運営に責任をもつ理事選出の母体になる重要な役職である。それだけに評議員には教職員の意向を充分反映できる人物を選ばねばならない。私は現在の教職員互選の評議員の選出方法に疑問をもつのである。

教職員互選の評議員十五名は教職員全員の十五名連記による投票によって選出されている。私はこの方法が何年ごろから行われているか知らない。まだ同志社が小規模で全教職員が顔見知りであったときに始まったものと思う。同志社がマンモス化し、学校単位に独立した存在になった現在では、同志社全体を見渡して十五名連記することは不可能になっている。職場単位に十五名の選挙区をつくって単記制にすれば、それぞれが信念をもって記名した人が当選する可能性が大きくなり、棄権者も減少するものと予想される。教職員の意見を同志社全体の運営により反映させるために評議員選出方法の改革が必要である。

今、同志社で深刻な問題の一つは全教職員に対するクリスチ

ヤン教職員の割合が年々減少していることである。定年退職したクリスチャン教職員の後任として就職する教職員の多くがノンクリスチャンである。本校では、来年度の教員採用にあたり「キリスト教信者、またはキリスト教教育に理解のある者」との希望条件をいれたが、良い人材が得られないでいる。ノンクリスチャンの教員にキリスト教教育ができない、と言っているのではない。

私は平成元年度宗教部副主任と同和教育推進委員をしていた。キリスト教の精神で同和教育は解決できると確信しているので、礼拝に積極的に同和教育を取り入れた。年度末に大阪同和教育研究会第三部会で報告したところ、大阪のある著名なキリスト教学園の先生が「私の学校では礼拝の奨励を信者以外の先生にいくら依頼しても引き受けてもらえません。同志社は信者以外の先生も順番で奨励しておられるとのこと、羨ましい限りです」と言われた。

しかしクリスチャンの教員がせめて二割でもいればより充実したキリスト教教育をおこなうことができると思われる。キリスト教教育を積極的に推進する者がいなくては立学の精神は単なるスローガンに終わってしまう。

今年六月上旬、突然新聞紙上に同志社大学文学部文化学科の教職員や卒業生子弟の特別入学問題が取り上げられ、続いて学内高校のそれも採り上げられた。本校に関する記事では「本年度教職員子弟の受験者は六名、内一名は合格点以上で合格、三

名は合格点の八割以上で合格、二名は八割以下で不合格」と我々内部の者でさえ知らない数字が掲載されていた。しかも本校では中学入試のとき、一般受験生に不利にならないように、定員二二五名を確保するに足る合格者数を決定後に、教職員子弟に規定の得点者がいた場合、入学させていたことについては一言も記されていない。

いづれの新聞も入学試験という観点からのみ「特別入学は不正行為ではないが、一般受験生からみれば不公平である」と主張していた。以来、本校でも教職員子弟の特別入学について検討されているが、存続・廃止両論があり、未だに論争が続いている。

大阪の私学では生徒急減期を目前に控え、推薦入学制度を大幅に採り入れることが検討されている。それぞれの私学には立学の精神があり、同志社と言うまでもなく新島先生がキリスト教教育をおこなうために設立された学校である。そうであるから推薦入学制度もそれに基づいて考慮されなければならない。

現在、同志社大学にはスポーツ推薦の入学制度があるが、それと共にキリスト教関係者の子弟に対する推薦入学制度があってもしかるべきであろう。学内諸高校から同志社大学に多くの生徒を推薦で入学させてもらっているのは、学内の高校または中学で三年間または六年間キリスト教教育を受けた者が同志社大学に進学して大学のキリスト教教育の中心になることを期待していることである、と私は思っている。

私は本年度四六名のクラスの担任をしているが、クリスチャ

ン家庭の生徒は一人もいない。せめて一クラスに三人でもクリスチャン家庭の生徒がいれば学校の雰囲気もかわりキリスト教教育の遂行にも役立つことであろう。クリスチャン家庭の生徒でなくても、それに準じる者として同志社教育を受けた者の子弟、さらに現に同志社キリスト教教育をおこないつつある者の子弟が一定の割合で存在することは、同志社教育の遂行に必要である。

同志社タイムス第四百六十号には異校友会長の挨拶として「校友会では理事、幹事、評議員の子弟の推薦入学については、昭和六十年十一月二十四日、理事会において満場一致で辞退を決議しております」とあるが、父母の役職によって子弟の合否が左右されないことは当然のことであって、あくまで子弟本人の学力が推薦基準点に達しているか否かによって決定されるべきものである。本校は教職員の子弟の特別入学のみが実施されていたために「教職員だけの優遇措置だ」とか「教職員だけの特権だ」とか言われているが、本来は立学の精神を貫徹するための制度としてもっと幅広く拡大されるべきものである。

ほとんどの宗教関係の学校では一定の割合で信者の子弟を特別入学させている。同志社で「学生生徒の一割はキリスト教関係者の子弟」という規定を設けたら、「不公平である」と言われるであろうか。

本校に「教職員子弟の特別入学制度を廃止することは、同志社の私学としての独自性を否定して同志社を公立化すること

ある」と主張する教員がいるが、問題の本質を衝いている主張である。今こそ同志社の教職員と関係者は公共性が求められるなかで、同志社の独自性を維持し独自性の存在意義を高めるためにお互いの意見を腹藏なく出し合うべきときである。

そして、誤った選択だけは絶対にしてはならない。新島先生は「自責の杖」で「同志社の教職員は絶対に過ちを犯してはならない。過ちを犯せば被害者は生徒ですよ」と私たちに教えておられるからである。

## 同志社香里中学・高等学校の場合

### —宗教教育からの発言—

佐野 昇

(香里中学・高等学校教諭)

新島襄の渡米の動機は、黒船が来て開国を迫ったさい、まざまざと見せつけられた文明の力の差にあった。このままでは、日本は植民地化されるか、あるいは、滅ぼされてしまうかのいずれかだろう。早く彼らに追いつかねばならない。国禁を侵してでも渡米して進んだ文明を学んでこよう。自分のためではなくて日本国民のためなのだから、渡航禁止の国禁を犯す結果になっても仕方がない、と覚悟した。しかし、彼には、更にもうひとつの重要な目的があった。キリスト教を知りたい、人の命を粗末にする陰惨な日本の社会を、本当に人ひとりを大切にす

る明るい社会にするために、いきいきとした生きる力にあふれたキリスト教を学びたいということにあった。約十年間の米国留学と生活体験を経て、渡米の動機であったことが具体的に覚えてきた。それは「日本の良心となるべき人物の育成」であった。従って、同志社教育の根幹は、初めから、知的偏重を避け、この延長線にあるといえる。学校だから、「知性」の練磨が大切であることは言うまでもないが「知育」偏重を避け「徳性」と「靈性」の教育啓発につとめ、兼ねて「体育」の向上をはかる、というのである。

さて、与えられた主題に対して、新島襄と同志社の原点とすべきものは何か、たとえば、いわゆる「四大教育要綱」①新島精神②国際主義③民主的伝統④とこれらを一貫するキリスト教主義。「新島先生の教育宣言」①国民の安危と教育②一国の良心

③良心と手腕④キリスト教的徳化⑤私立経営（私立学校の意義、事業は親切、費用はかからない、活気がある。良く行き届く）  
⑥百年の大計（同志社大学設立の旨意）などがあるが、今回のような主題には「同志社に対する新島襄の遺言」が適していると思う。

もつとも、何が何でも「原点」に立ち返れば良いというものではない。道に迷ったと思えば、もう一度出発点に戻ってみるのは、正しい方向を確かめたり、重要なことを見落としてはいいかを確認するためである。その意味内容や意志内容を現在や将来に生かし、実現するためには今までと全くちがった道を選んだほうが良いケースもあり得るだろう。新島襄の遺言を原点として現実を反省し将来向かうべき方向を確認する。遺言の先づ第一に『同志社の前途はキリスト教の徳化、文学政治等の興隆、学芸の進歩三者相伴い、相待て行ふ可き事』。一番最初に「キリスト教」がある。同志社は、活力あるキリスト教による人作りを第一とし、「日本の良心となるべき人物」の育成を目的とする。『同志社教育の目的は其の神学政治文学科学等に従事するに係らず皆精神活力あり真誠の自由を愛し、以て邦家に尽す可き人物を養成するを務む可き事』同志社が香里学園を合併するに当たって、当時の大塚節治総長が「香里学園との合併についての報告」の中で「この合併によりまして、宗教教育上もつとも重要にして効果的なる、中等、高等教育機関を増設し、同志社大学精神教育の基礎培養に一進歩をなすこと」とある。香里中・高等学校が同志社としてあるのは宗教教育のためだという。

このことは常に再確認しなければならないことである。『社員たるものは生徒を鄭重に取り扱うべき事』生徒を甘やかせよ、といつているのではない。生徒たちは被教育者だからといって、半人前に扱ってはいけない。『ひと』は何者によっても置き換えることのできない唯一絶対性をもつ。絶対性の論じられる次元は宗教的次元である。人を神との関係において見いだす世界である。自分でさえも自分のものではなくて神のものである世界である。そこに基本的人権の重さが成り立つ。神のものは丁重に扱うべきである。ここに言う、同志社の「社員」とは、今の「社員」ではなかつたが、「今」は、拡大解釈しなければ、その精神を失つてしまう。更に、教職員だけではなく同志社に関係のあるすべての者、学生生徒もちろん、神に属すものとして、「鄭重に」さらに「親切」に接すればすべては変わるだろう。いくら校舎が光ついても最新の教育機器があふれていても、そこに集まる人々が、互いの存在を否定しあい、自分のことしか考えず、相互不信の中にあるならば、学校として、もはや、崩壊したといえよう。互いに語り合った言葉はもう同じない。互いに断ち切れた関係の修復こそ「宗教」本来の役割である。「宗教」と訳された「レリジョン」はラテン語「レリギオー」更にその語源のひとつに「レ・リガレ」。その意味は「再び結びあう」「再・結合」という意味である。キリスト教の教えの中心も「和解」である。キリスト教主義を同志社教育の理念の根底に置くゆえんである。

『同志社二於いて八個儻不羈なる書生を圧束せず勤めてその

本性に従ひ之を順導し以て天下の人物を育成す可き事』同志社は隆なるに従い機械的に流るゝ恐れあり切に之を戒慎す可き事』「一人」を「ひとり」として認める事。決して「全体分の一」としてはいけない。新約聖書の中に「百匹の羊がいたが、そのうちの一匹が行方不明になったので九九匹を置いて迷子になった一匹を探しに行く」という話がある。大抵の人は、一匹を探しに行つてゐる間に置いてきた九九匹にもしものことがあつたら、どうするか。百分の一より百分の九九の方が大切だといふ。大抵九九は一よりも大だからといふ数量の世界のみで考へてゐる。「ひと」の世界には、数量化すべきでない世界がある。ひとの場合、一はかけがえのない一であるから百人の中のひとりも一人だけのひとりも同じようかけがえのない「ひとり」である。「かけがえのないひとり」とは、絶対的一である。同志社こそ、そのひとり、ひとりに目を注いだ教育をする学校でありたい。

「教育は「ひと」である」これは今後とも変わらないであらう。もつともこれからは、環境や設備が今までよりも必須条件となるだろう。しかし、単に技術だけを教える学校ではなしに、高度な技術にとどまらず、これからますます求められるであろう豊かな人間性を育てるものは、やはり「ひと」だからである。「ひと」のいない宗教教育は考へられない。

宗教教育の基本は高度な学問でもなければ事業や特別行事でもない。日々の平凡な学校生活にこそある。数条的に形式化された指導ではなしに、各教職員の持ち味を活かした温もりのあ

る心が大切であらう。より具体的には「親切」であること。教員も職員も互いに親切であること。特に、学生生徒に対して親切でありたい。常にそうでありたい。親切な授業、親切な教員室、親切な窓口、それだけで学校は随分変わる。「親切」はテクニクの問題ではない。本当に人を「ひと」として遇してゐるかどうか、その人の人間性の問題であり、生きざまの問題である。更に、同志社は受験生に対しても「親切」でありたい。同志社の教育理念と教育目的は明確である。キリスト教の徳化と良心主義である。同志社教育に合う人と合わない人があるということになる。受験生には自分が同志社に合うか合わないかは受験時点では良く分からないかもしれない。入学試験の要素として、受験生の同志社教育に対する適合性がわかるようにできるならば少しは知育偏重の弊害を修正できるのではないか。美しい設備をいかすものは「人の心」であらう。

# 今礼拝について思う

森 一郎

(女子中学校・高等学校教頭)

同志社女子中・高等学校の現在掲げている教育の目的は、『新島襄先生が同志社を設立された精神にもとづき、キリスト教を基本として人格を養い、単に学業や技術にすぐれているだけでなく、聖書にいう「地の塩」、「世の光」となる女性、すなわちキリスト教人生観、世界観を身につけた主体性のある人間として、社会の各方面において、その能力に応じて奉仕する人間を育成することを目的とする。』である。(一九四九年)

またこれ以前に女子部が掲げてきた教育の目的をいくつか拾い上げてみると

善良有益ナル女子ノ養成(一八八〇年)

……精神的の教育にして智徳併行主義に基き単に智識の注入に甘んぜず(一九一七年)

特ニ基督教主義人格教育ノ特色ヲ發揮シ人格ノ養成ニ努ルヲ以テ目的トス(一九三八年)

とあるように過去の教育の目的を見てきても表現の方法は変

わっても内容は一貫して、知識一辺倒に偏るのでなく、智育徳育のバランスの取れた人格の育成——勿論、徳育の基本はキリスト教に基づいて——を目指してきている。

このことは「同志社大学設立の旨意」の中にある

其目的とする所ハ、独り普通の英学を教授するのみならず、其徳性を涵養し、其品行を高尙ならしめ、其精神を正大ならしめんことを勉め、独り技芸才能ある人物を教育するに止まらず、所謂る良心を手腕に運用するの人物を出さんことを勉めたりき、(中略)真理を愛し、人情を敦くする基督教主義の道徳に存することを信し、基督教主義を以て徳育の基本と為せり、……………

と目的を同じくするところである。

しかし、現在の同志社はどうかであろうか。

新島先生が大磯の百足屋で残された同志社に残された遺言で、  
例えば

同志社の前途は基督教の徳化、文学政治等の隆興、学芸の進歩三者「相伴ひ」相待て行ふ可き事

同志社は隆なるニ従ひ機械的二流の恐れあり切に之を戒慎す可き事

これ等は守られているであろうか。『三者「相伴ひ」』に対して、知育偏重のきらいがあるのではないだろうか。特に基督教の徳化の特色が薄れているのではないかと思われる。これは勿論我々側の努力もさることながら、世間一般の学歴を重要視する傾向とも関係があるだろう。

同志社大学・同志社女子大学をはじめとして同志社は世間には認められていると思える。どちらかと言えば同志社が有名になり過ぎていて。その為に、同志社で学ぼうとする学生はその知名度故に志願して来ているのではないだろうか。勿論、真摯に新島の精神を求めてやってくる学生も少なからずあるとは思いますが、どれくらいか。生徒が新島先生が教育の目的とした徳育の基本をキリスト教においた智徳併行の教育を求めてやってきているであろうか。

同志社女子中学高等学校では、中学・高校（更には大学まで）の一貫教育の中で新島先生の掲げられた教育をいかに実行して行くかが常に考えなければならぬ問題である。幸いにして本

校を志願する生徒の人数は多い。しかし、本当に新島先生の精神を、キリスト教主義に基づく徳育を求めて志願してきているかどうかは疑問である。大学進学のための受験戦争の中で、「伸び伸びとした教育環境の一貫教育で勉学をして大学に進学したい。それも先のべた著名な大学になった同志社へ」確かにこのような考え方も一貫教育の中では大切な要素の一つであろう。受験戦争で疲れ果てた学生でなく、伸び伸びとした考えの持てる学生を育てて行くためには重要なことであろう。

しかし新島先生の求めたものは、キリスト教に基づく徳育を基本にして知育にも優れた人間を作り上げて行くことであつたろう。

本校では、毎日中高別々に一時間目の授業の前に二〇分間の礼拝がもたれている。勿論毎日の礼拝の行われている中で色々な問題を抱えている。

学校で行われる礼拝は、教会での礼拝ではない。教育の場での礼拝である。対象となるすべての生徒は、先に述べたように、教育の目的であるキリスト教に徳育の基本をおいた教育を求めてすべての者が志願してきているとは言えない。そのような学生を対象として学校の礼拝を持つことになる。

奨励に来ていただいたある牧師さんと雑談をしているときに「教会の礼拝なら話を聞きに来られるのであるが、学校の場合はそのうちではない。ある意味では不特定多数の人間に話かけることになるので、聞かせるように話を考える必要がある。」

この話の中に、生徒達広くは世間が新島先生の掲げたキリス

ト天主教に基づく教育を求めて志願するのではなく、別の意味での同志社を求めて志願して来ていると思われる。即ち、同志社大学・同志社女子大学への推薦制度があることで本校へ志願してくるのである。しかし、同志社女子中高での六年ないし三年の学校生活の後に大学に進学するが、大学では女子中高の特色があるというのを聞く。このことは、良きにつけ悪しきにつけ女子中高の教育の特色・効果が現れているのであろう。このような環境——女子中高の特色があり、かつ世間が一般に評価する同志社と新島先生の求めた同志社の教育とのずれがある——の中で最初に示した教育の目的に基づいた教育活動をいかにおこなって行くかが今後考えるべき問題であり、課題であらう。

さきほど礼拝での色々な問題を抱えていると述べたが、礼拝を通して色々の人々の体験や考え方を聞く。牧師さんあり、福祉の現場で活躍している人あり、卒業生あり、在校生あり、教職員あり等々、その年その年で宗教部の先生を中心に考えてもらっている。この礼拝の場を通して授業では得られない多くのことを生徒達は学び教えられるのであろう。

こういった中で在校生や卒業生の中に福祉の方面に興味を持つ生徒が少くならずおり、実際に現場で活躍している卒業生のことを聞きたま目している。

例えば、本校は三年前から京都市の社会福祉協力指定校になっているが、その関係で昨年の夏休みにユースアクション——青少年の福祉体験——に掲示しただけで自発的に十名ほどのもの

のが応募して参加している。  
勿論、これは福祉の場だけの現象を紹介したのであるが、当然他の分野でも目に見えるもの、見えないものとして起こっていることであらう。

開校以来、ずっと礼拝は守られてきている。その時その時特色々の問題を抱えてきたと思うが、その時代その時代に合わせて教育の場としての礼拝を守って行くことが、ひいては新島先生の目指した同志社の教育が守られて行くことになる。色々な学生が同志社の名を求めて志願してくる。それらの学生を同志社の教育方針に従って感化してゆく。その意味で礼拝を継続して行くことに意味があるのだらう。礼拝を通して新たなものを発見させるのであろう。



# 新島襄生誕百五十年によせて

森 永 長壹郎

(女子中学校・高等学校教諭)

新島襄生誕百五十年によせて何か書けとのことである。そこで私は勉学と礼拝という二つの面から述べてみたい。

一九九二年度は、高校三年生の選択科目・英語特講Ⅰを担当した。教材は担当者にまかされているので、私は四月から十月の中間考査まで新島関係の資料を読むことにした。読んだものをあげると次のようになる。

- 1、新島がワイルド・ロウヴァー号の中で紙切れに書いた渡航理由
  - 2、ボストン到着後、海員ホームで新島がハーディー夫妻に要望されて書いた自伝
  - 3、新島がフィリップス・アカデミーで書いた最初の英文文
  - 4、マッキーン著 *Story of Nesima*
  - 5、*My Younger Days*
- 英語の授業なので、いずれも英語で読んだが、参考資料として訳と解説もつけて理解を深めるようにし、夏休みには新島懸

賞論文に応募することを宿題にした。

九月に入ると高校二年生に対して、次年度の選択科目の調査があった。二年生が三年生の特講選択者に授業の内容を聞きに行くと、難しいというのと、新島懸賞論文に応募することが夏休みの宿題にできるので大変しんどい科目だという答が一番多かったそうだ。その反映として、今年度六十名の選択者があったのに、来年度は四十名に減ってしまった。

その反面、次のような反応もあった。中学一年で新島襄を勉強して以来、高三になって改めて新島について学んでみると、同志社に誇りが持てるようになったというのである。

「新島先生があんなに苦労してつくらはった同志社なんや」という思いをひしひしと感じた生徒もいたのである。新島の苦労が中学時代よりも深く理解できたそうだ。六年間の精神的成長の賜であろう。新島の英語と自分の英語を比較して、それぞれの思いを持ったことであろう。

テストの中で「ニイシマ・ジョー」を漢字で書かせると、書けない生徒が三分の二もいた。「フクザワ・ユキチ」や「オオクマ・シゲノブ」の場合も同じような現象が起るのであるうかと、私はふと思つたことであつた。

新島裏については、授業としては一般に聖書の時間に教えられる。英語の授業では *My Younger Days* が教材として使われる。他の授業でも新島について教えられるのではないのだろうか。新島は書をよくし、絵を画いた。漢詩を作ると同時に科学者でもあつた。病弱で苦しんだ人でもあつた。時代的には、日本は激動のさ中であつた。こんなことを考えると、どの教科でも新島と関連づけて教えるチャンスがあるのではないかという気がする。多くの角度から新島を学び、最後には全体像を作り出せるようになったらいいと思う。

次に礼拝について書きたい。礼拝は私にとつては、ストレスの根源となつている。「礼拝には教師も生徒も一人の人間として出席するものだ」とはよく説教の中で言われる。私がつもつて出席しても生徒が静かにしてくれない。こわい顔をして叱つたり、ウィンクして注意したり、「シート」と人差し指を口の前に立てたり、時にはげんこつでゴツンとやつたりしながら、三十年を過してきた。注意される生徒は殆ど同じである。注意をする方もされる方も愉快なことではないので、時には人間関係までも悪くなつたことがある。

このようなことが続くと私の場合、心臓がどきどきして礼拝に出ること自体が重荷になる。しまいに少々うるさくても心

臓を痛めるほど生徒にかかわることなからうとじつと忍耐している、見るに見かねた他の教師が私のクラスの生徒に注意されることがある。有難いことである。と同時に、私自身の逃げの姿勢や力不足を情けなく思う。礼拝中の教師が一人間になれることはまれである。殆ど毎日、監督者にならざるを得ない現状だ。

しかし、こんなこともあつた。試験期間中のことである。ある教師が礼拝で話をした。礼拝に続く一時間目の自分の出題テストの中で、その日の礼拝の主題を質問したところ、かなりの生徒ができていたそうだ。おしゃべりをしながらでも生徒は話に耳を傾けているのであろう。しかし礼拝時の姿勢としては問題を残すであらう。

礼拝について見直されるチャンスは卒業生が実習に戻つきた時である。在校中は礼拝中に眠つていたものも、実習中は積極的姿勢をもつて参加している。実習という立場もあろうが、礼拝を見直す良いチャンスでもあろう。実習生に説教を頼むことも意味のあることだ。

新島がワイルド・ロウヴァー号でボストンに着いたのは一八六五年で、南北戦争が終つた年であつた。社会的混乱が起る中で、宗教の影響力が薄れていく。伝統的なものが失われ、人間の生き方にも影響を与えた。今日の日本はどうであらうか。経済は著しい発展を遂げ、飽食の時代となつた。その中にあるテレビの影響は見逃せない。われわれはテレビを見ながら夕食のひと時をすごす。テレビの話を聞きながら、同時に家族と

の会話を進めるのである。その姿勢が礼拝にも出ていないだろうか。講師の話聞きながら自分たちの会話も進めていく。そこには何の違和感もないのかもしれない。またわれわれは世界に目を向けることができなくなったのだろうか。日常の糧も得られない人々のことを忘れ、祈ることさえできなくなったのであろうか。新島がいたアメリカは戦後で国民の心が荒れていたのに対し、今の日本は物質面で豊かになりすぎ心を忘れてしまつてはいないだろうか。

このような現状にありながらも、礼拝が続いていることは大変なことであり、意味のあることである。

J・D・デイヴィスは、トレニンング・スクール(同志社英学校)の創設にあたり、「聖書を教えてはいけない」という府庁の意向には同意しないようにと新島に言いふくめていた。しかし、デイヴィスの手紙によると新島は、府庁の意向を受け入れて戻ってきた。デイヴィスには、聖書を教えることのできないトレニンング・スクールは考えられなかったのだ、彼は荷物をたたんですぐにでも京都を去ろうとしたほど腹を立てた。京都ホーム(女子部)の創立の目的についてデイヴィスは、トレニンング・スクールを卒業し、牧師を目指す若者の妻になれるだけのキリスト教に基づく教養を身につけた女性の教育を目的と書いている。新島が京都にキリスト教に基づく学校の創立を知った仏教や神道の僧侶、一万数千人が反対したこともデイヴィスの手紙の中に出てくる。

このような中であつて官許同志社英学校は祈りをもつて始ま

った。同志社からキリスト教を取り去ったとき何が残るのであろうか。新島の心の中には、日本を文明国にするためにはキリスト教しかないと考えていたことは *My Younger Days* をはじめ随所に見られる。

同志社の草創期には、その時代なりの問題があつた。そして今は今なりの問題ををかかえている。いずれの時代にも何らかの問題があつたはずである。同志社は今日まで百十七年にわたつて問題にチャレンジし、解決してきた。これからもきつとそうであろう。



# 関西から世界へ

—フィリップス・アカデミー、アンドーヴァーの現状に学ぶ—

坂田直三

(国際中学校・高等学校教頭)

## 一、はじめに

新島襄生誕一五〇年記念の年に際して、新島の脱国の決意と滞米中の若き日の生活に思いを馳せながら、新島が渡米後はじめて学んだフィリップス・アカデミー、アンドーヴァーと本校の現状を比較し、そこから学内中・高の将来の一つの理想像を考えてみたい。もっとも同校は世界の名門校として有名な学校だが、同志社の学内の中高いずれか一校でもよいから、将来同校と同じような世界の名門校として存在しえればとの願いを込めて考えてみたい。

## 二、フィリップス・アカデミーとの交流

一九九一年夏のフィリップス・アカデミー、アンドーヴァー

のマックネマー校長夫妻の本校訪問を機会に本校と同校の交流関係が生まれた。交流の具体化の第一歩として本校の生徒を同校が毎夏開講しているサマー・セッション(夏期講座)に参加させることにした。一九九三年夏のサマー・セッションに本校から五名の生徒が参加する。長期的な交流としては、同校が日本語クラスを開講(一九九三年九月から開講の予定する時には日本語の実習のために同校の生徒を本校が受け入れ、同時に本校の生徒を同校に留学させることや、教員の交換などがある。いずれにしても校祖新島が、渡米後最初に学んだ学校と交流することは非常に意義深いことであるし、また、同志社の建学の精神の発祥地を本校の教員や生徒が訪問することは、新島の教育思想を理解し、体得するのに大いに役立つことと思う。

フィリップス・アカデミーと交流関係を結ぶに際し、同校の内容を、同校に関する数々のパンフレットやカリキュラムで検討した。また、実際同校を訪問し、施設、学校経営の方針、教

育内容を概観することもした。とくに校長はじめ多くの教職員と話をして学校経営、教育にたいする意気込みを知ることでもきた。校地の広さ、施設の立派さなどのハード面はもとより、学校経営、教育内容、教職員の教育に対する情熱などソフト面でもただただ立派といわざるをえない。

### 三、フィリップス・アカデミーについて

新島が渡米後最初に入学した学校がフィリップス・アカデミーであり、そのでの在学期間中、信仰を深め、英語を習得するといった十年余の渡米生活の基礎をつくった学校であるということも広く知られているが、同校は新島を同校の最初の、しかも誇りとする卒業生として一二六年経過した今も紹介している。同校の一九九一年作成のパンフレットの中に、新島が上海からポストンまで約一年間の海上生活を過ごしたワールド・ローヴァー号の絵と共に次の文章が書かれている。

“In 1864 Shimeta Neeshima left Japan as a stowaway on the clipper ship Wild Rover for America and sold his samurai sword for a Chinese New Testament. He was adopted by the shipowner, an Andover Trustee, was christened Joseph Hardy Neeshima, graduated from Andover in 1867, later from Amherst and the Andover Theological Seminary, and became the first Japanese to be ordained a Congregationalist

minister. Neeshima returned to Japan to found the Doshisha, a great university in Kyoto dedicated to Japanese and Christian ideals. Doshisha recently celebrated 101st birthday”

アンドーヴァーを訪問すると一二六年前の新島の姿が思い起こせる。同校の Oliver Wendell Holmes Library には、若き日の新島の写真や家族同様に世話をしてくれたミス ヒドゥン宛に新島が出した手紙が飾られており、同校のすべての教職員は卒業生が設立した学校からの来訪者として我々を手厚く遇してくれる。同校には未だ新島が生きているといっても過言ではない。同志社の建学の精神の発祥がここにあるような気がしてならなかった。なぜなら、この学校が良き教育を行うため傾注している努力に、また努力を支える教職員の情熱に新島が学んだ一二六年前のパイオニア・スピリッツを感じるからである。二十一世紀の同志社を考える時、現在われわれにその情熱があるだろうかとの自問から始めるべきである。

### 四、フィリップス・アカデミーの概況

同志社の田辺校地の三倍の五〇〇エーカーの敷地の中に八〇の建物(内寮棟五六)があり、九年生から一二年生まで一二〇〇名の生徒を教育している。同校の生徒募集の方針はあらゆる国から幅広く、人種、民族を越えて生徒を入学させるといふこと

である。そして、色々な国、人種、民族から集められた優秀な生徒たちを、専任一九四名、講師五一名、計二四五名の教員が教科指導・生徒指導・カウンセラー・スポーツコーチなどの面で手厚く世話をしている。カリキュラムは非常に豊富で美術、音楽、演劇などを含む一八のアカデミック部門があり、さらにそれは一八九のコースに分れている。外国語はドイツ、フランス、イタリヤ、ギリシア、ロシア、スペイン、ラテン、中国の八か国の言語のコースが開講されており、さらに一九九三年九月から日本語が加えられ全部で九か国の外国語のコースが開講される。卒業生の三分の一はアイビーリーグの大学に進学している。一年間の総経費は、約三〇〇〇万ドル(約三八億円)、この内学生納付金は五二%に過ぎず、四八%は寄付金である。また、ファンドとして約一億九千万ドルもっており、その利息で生徒に奨学金を出している。寄付金を集めるために、キャピタルディベロップメントという組織をつくり一五人程のスタッフで積極的に運営を行っている。

#### 五、フィリップス・アカデミーの教育内容・学校経営の特徴と 本校のそれとの比較

同校の教育内容・学校経営の特徴は概略は次のようにまとめられる。①生徒数に比し極端に教員の数が多い ②多種多様な生徒を集めている ③非常に多くのコースをつくり生徒に選択させている ④外国語のコースを八つも開講している ⑤一〇〇〇名の寮生をほとんどの教員が面倒みている。それによって

全人教育をしている ⑥非常に高いレベルの教育を行っており卒業生の三分の一はアイビーリーグの大学へ進学している ⑦奨学金制度が完備している。それを可能にしているのは多額のファンドをもっているからである。⑧年間の総経費は、約三八億円であり、その四八%は寄付金である ⑨豊かな財政で積極的に教育を展開している ⑩授業料だけに頼らず絶えず財政面の強化に尽力している。あれだけ蓄積のある学校にもかかわらず全教職員が経営にたいし自分の問題として取り組んでいる。

同志社国際の生徒数一〇八〇名、専任教員四三名(一九九二年度)と比較すると教員一人当たりの受け持ち生徒数は極端に異なり、また、外国語も国際三か国語(ドイツ、フランス、スペイン)対フィリップス八か国語である。さらに、受け入れ留学生数、奨学金制度の違いも比較にならない。学校の歴史、敷地の大きさ、施設の立派さを別にしても、専任教員の数、カリキュラムの豊富さ、国際的に開かれている度合い(外国語講座の多さ、留学生受け入れ数の多さ)など本校との差は非常に大きい。こういった教育内容の差はどこから生じているのかというところはやはり財政的な規模が違うからだと見える。国際の年間経費の約五倍を費やしてほぼ同数の生徒の教育を行っているために自ら手厚い教育が可能になり、また、その手厚い教育が財政面の強化に役立っているのである。

#### 六、むすび

同志社の教育理念は、キリスト教主義、国際主義といわれている。しかし、参考としたフィリップス・アカデミーのそれと比較すると実践の面ではなほだ貧弱である。新島が学んだ頃のフィリップス・アカデミーは現在に較べてピューリタン・スピリッツはもつと強かつたと想像できる。しかし、多くの外国語講座を開講したり、多くの留学生を受け入れ、彼等に奨学金を出すといった国際主義教育は現在でも非常に盛んである。また、その目的達成のためにはあくまで貧欲である。一つのプロジェクトを実施するために必ず積極的な寄付集めを行い財政面での

## 新島先生の教育理念に照らして

仁井国雄

(国際中学・高等学校嘱託講師)

一、入試の季節に学内各中高が開く入試説明会では、学校側は特色の一つとして必ず「同志社のキリスト教主義(教育)」を取り上げている。たしかに教育課程には、「聖書」があり、宗教部を中心にして、毎朝の礼拝、特別礼拝、春秋の宗教強調週間、病院等の慰問その他、学校によっては修養会、聖書研究、クリスマス・ページェント等が行われ、そのために関係者は非常な

バックアップをしている。新しい教育を展開するという意気込みのなかに、教職員全員のパイオニア・スピリッツを感じる。学内のいずれの中高もこのパイオニア・スピリッツが不足してはいないか。直接外部に自分の評価を求める必要のない一貫教育といった温床の中では、もはやパイオニア・スピリッツは必要としないのだろうか。同志社の中高が世界の名門校となるためには、教育内容、学校経営の両面で現在の殻を破った新しい発想と実行力が必要な気がする。

努力と配慮をしておられることはまぎれもない事実であり、敬意と感謝を捧げたい。  
二、しかし何か一本ぬけているような気がしてならない。かつて宗教主任だった私の責任は認めるとしても、生徒が本気で礼拝の話に耳をかたむけているだろうか。もちろん真剣に聞き、考え、ついには受洗に至る生徒もいるが、それは少数派に属す

るのではないか。十年以上も前のことだが、宗教強調週間の講師として来ていただいた牧師が、数校で話をされた感想として、「同志社ではキリスト教が（反対されるのではなくて）無視されていますね。」と話されたのが、今だに気になってしょうがない。

三、同志社百十余年の歴史の中では、男子部で伝道者派遣や一八八四（明治十七）年のリバイバル運動があったし、女子部でも第一回卒業生が朗読した作文には「基督仁愛ノ白日ヲ仰カシムルハ我ラノ当ニ当タルベキ大任ニアラズヤ」とあり、小児安息日学校（今の教会学校）の礼拝献金で、全校から一、二名を公選、倉敷、名古屋等に伝道者として派遣している。こうしたことが可能な学園の雰囲気こそ基督教主義教育が生んだものといえる。もちろん百年前と現在とは人々の価値観も社会の風潮も激変しているし、当時の同志社はトレーニング・スクール（フイメール・トレーニング・スクール）の色が強かったということもあるが、あの雰囲気にあこがれに似たものを感じることも否定できない。では、どうすればいいのだろうか。

四、昨年十一月二十九日、たまたま日曜日だったので、同志社創立記念礼拝を女子部栄光館フアウラー・チャペルで記念日当日に守ることができた。その日、筑波学園教会名誉牧師稲垣守臣牧師がなさった説教は、同志社教員として、また同志社教員として出席していた私には、一語一語胸にせまるものがあり、久し振りに福音伝道に触れた思いがした。まず、説教の中の数節を、私なりにまとめて記してみたい。

△同志社中学時代、海老名弾正、堀貞一などの先生から「新

島教」を教えこまれたが、中三の時の早天祈禱会で有賀鉄太郎先生から「キリストを見よ」という奨励を聞き、ショックであった。それまでは新島を神のごとく思っていたからである。「新島襄を見てキリストを見なかつたならば、新島先生は少しもお喜びにならないであろう」（有賀）

△一九三五年、湯浅総長は総長就任演説で「新島先生は校祖であり、同志社の主は神である」として、基督教主義をつらぬこうとされた。

△新島の設立した西京第一公会から第三公会の中で、第二公会が現在の同志社教会であり、「同心一体といわなくても同心二体であった。同志社教会は同志社教育の中核となった。私にとって同志社教会とは、チャペルのことである。日曜日に閉ざされるのは寂しいことである。戸をたたくキリストと新島の肖像とが重なって浮かんだ。「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。」（黙示録三・二十）この扉が内側から開かれるのを期待する。

△同志社よ。永遠なれ。外見のみでなく、キリストの生命の躍動する同志社を見ているのである。

五、この説教が示唆するのは何か。

①新島精神・同志社精神の根底にある基督教について、さらに深く教える必要がないだろうか。

②同志社と同志社教会との不即不離の關係の再認識の必要はないか。「自由教育、自治教会、両者併行、国家万歳」

③チャペルの活用、週日の昼休みに宗教行事（たとえば讚美

歌合唱、同志社の歴史を語る講演等）をすることにより学生に働きかけることは有意義であると思う。

さらにつけ加えさせていただくなら

④教職員が一人でも多く進んで聖日礼拝に参加されることが望まれる。同志社中学などが、生徒に聖日礼拝参加を指導しておられるのはありがたく、生徒が教会で先生の姿を見かけることは、最良の宗教教育ではないだろうか。

⑤生徒が受け身でなく、積極的に基督教に接近する方策の検討。クリスマスは冬期休暇中、イースターは春期休暇で生徒不在の年が多いという不利な条件下での難問だし、解決案があればとくに実施しておられるわけだが結局、学校側の積極的な態度の確立と教職員の問題意識・目的意識の確立ということになる。学校礼拝に教員が全員出席することから始めるべきだろう。

六、大学にお願いしたいことを記して拙文を終わりたい。

A 大学入試に帰国生徒受け入れ枠をもうけていただきたい。

一芸に秀でた者に特別考慮をする大学もあらわれる昨今だが、海外で教育を受け、現地社会の文化、その文化の基礎にある宗教、異質なものの考え方などに触れて生活してきた帰国生に対し、京大、立命大、同志社女子大などのように門戸を開放していただけたらと思う。これは海外在留生の進学相談関係者の一人として切望いたします。国立大学・私立大学でこの十年間に帰国生枠を設けた大学数はそれぞれ七大学↓六八大学、二二大学↓一三六大学へと増加し、志願者数もそれぞれ九四名↓九二

〇名、九七四名↓五八一六名に増加している。この数字は併願者を含んでいるから実数はこれより少ないとしても相当な増加である。早稲田大学国際センターでは「帰国枠大学入試は、不利な状況にあつた帰国生を助けるために設置されたが、今では、各大学が海外経験を持った優秀な生徒を欲しがっている。」と語っている（ヒアロスによる）。大学の入学者選抜方法として、推薦入試・一般入試と併せて帰国枠入試が記載されるようになってきている昨今、ご考慮いただけたら幸いである。

大学の入学者数に制限のあることは承知しているし、㊦㊧と帰国枠とのかね合いというむずかしい問題のあることも容易に想像できるが、そこを何とかというお願いである。

B 国際政治・国際経済を研究する学部・学科の新設

これらの学部・学科を卒業し、たとえば国際連合、在外企業などで活躍する学生が出現したら、同志社関係者としてどんなにうれしいことだろう。

# 教育者新島の生徒へのまなざし

—その理念と現代の同志社—

竹山 幸男

(中学校教諭)

新島の教育理念は、知識偏重でない、天地創造の神様から与えられている良心を手腕に運用する、社会を真に変革し得る能力を有する人物の育成にあった。そして、その根幹には、キリスト教信仰、聖書の教えがあった。このような新島の教育理念については同志社大学在学中から折りに触れて聞いていたが、九二年四月から同志社中学で、社会科教師として働くようになって、それが現実の同志社教育の中でどのように生かされているかに関心を持たされた。新島の教育理念は、同志社教育の中でどう具体化されたのか、そして、それがどのように教育に生かされていくべきなのかを考察していきたい。

まず、新島は、画一化された機械的な管理教育ではなく、一人ひとりの生徒の個性と自主性を伸ばす教育を目指していた。(横田安止宛書簡、一八八九・十二・三十)その当時の同志社は、生徒数が全体で九百名程度だったので、現在の同中(同志社中学)とほぼ同じ規模であった。私が同中に来て感じたことは、生徒

達の知識の詰め込みの多さと、それを忘れていく素早さである。そして、正解がないと安心しない。基礎的事項をはるかに超える暗記量が、考える力、独創性をむしろんでいる現実があるのではないかと、ということである。テストの中に、画一化した知識の上塗りの内容が多ければ多いほど、塾で訓練を受けてきた生徒達はそれに順応し追われてしまい、考えること、自ら進んで何かを学ぶことを停止させてしまう。一方教師の側も、データを眺めながら、一生懸命教育をしている錯覚に落ち入っていないだろうか。推薦制度のプレッシャーを、過剰にかつ曖昧にかけすぎているため、一人ひとりの個性、自主性を伸ばすどころか、「てんとう個儻不羈ふきなる書生」を圧束し、私学の有する自由な教育を自ら画一化し、公立学校化してきているような現状があるのではないかと。また、体罰が新島の教育理念に反すること  
も言うまでもない。

第二の特色は、新島の生徒への思いやりの豊かさ、一人ひ

とりの生徒を非常に大切にしている心である。これは、新島の学んだアメリカのキリスト教主義学校での体験が、見事に還元されているものだろう。その一つの具体例は、クラスの中で一番できないと思われる生徒を大切にしている教育、即ち生徒を現段階のみで評価せず、知識面での将来伸びる可能性を信じる姿勢であった。この姿勢は、聖書の迷った一匹の羊を探し求める羊飼いの姿勢に通じている。日本の教育はいざ知らず、現在の同志社の中でも、できない生徒がどんどん落ちこぼれていくような教育が行われていないか。現実には、同中に不登校の生徒が出て来ている中で「同志社に合わない生徒」として消極的に接するのではなく、その生徒達を暖かく見守り支えていくとする教育、さらには、不登校の生徒が生じている背景にある学校側の問題を解決していくこうとしているか。特に、社会的には「中高一貫教育」ととらえられやすい同中から高校の段階において、学路上の問題で推薦されず、事実上の同志社からの放校（退学）処分になってしまうことも、新島の生徒を見る眼とは違う次元での判断である。さらに、大学への推薦についても、学部によって推薦内定生徒対象に実施されている英語や数学等の基礎学力テスト等の結果から見た、内部推薦生徒の「学力」の低さについてその意見も耳にする。しかし、大学の授業そのものが、現在の学生の状況に対応した魅力があり、受けていく上で「学力」を必要とする内容になっているかも知れない。また、同志社大学を含む日本の大学の多くが、諸外国の大学に見られるように、主体的に考え、取り組んでいく学力を有して

いる者しか卒業ができないという内容を、本当に備えているのかどうか十分自己吟味されなければならないと思う。推薦制度に関する問題を解決するためにも、中・高・大学がカリキュラムまで含んだ上で、同志社の十年間の教育で、どういう生徒を育てていくかを、気軽に日頃から話し合える場を作る必要がある。

もう一つの具体例は、新島が生活指導上の問題を起こした生徒に対しても、その生徒を十分に受けとめて、愛のこもった指導をしていたことである。有名な「自責の杖」事件においても、生徒の不満に率直に耳を傾け、ストライキを校則違反という言葉で処罰せず、校長としての自らの指導の責任を取った。さらに、欧米視察旅行途中に、生徒が放校処分を受けたことを聞き、心を痛め、涙を注ぎ出して祈り、翌年帰国後の開校十周年記念式の演説の中でもこのことに触れ、「一人一人は大切なり」と非常に残念がっていた。新島は、問題を起こした生徒を素早く批判し、処罰していく指導ではなく、キリスト者としての広い愛の心によって、生徒をとらえ、どのように問題の意味を知らせ、立ち直らせていくかという観点の指導をしていた。それは、形式上の厳しさではなく、教師の側に忍耐と寛容さを必要とする、生徒を愛するが由の本当の厳しさだと思ふ。姦淫の女、ザアカイなど聖書の中で大変な罪を犯した多くの人物が、神様の前に罪を悔い改めて、イエス・キリストの十字架による救いを受け、良心に従った人生を再出発していくように、新島も、問題を起こした生徒を、聖書の教えを通じて、同志社の中で立ち直らせ

たかつたのだと思う。従つて、留守中の放校処分は非常に心を痛めている様子からしても、新島の生徒への指導観では、生徒指導上の問題が生じて、それを理由に放校（退学）はさせなかつたと思われる。現在の生活指導上の諸問題への対応についても、それが高校・大学への推薦の障害となつた場合には、同志社からの事実上の放校処分ともなり得る。現在の推薦制度との関係についても、この新島の生徒への指導観は、十分活かされていくべきものであるし、事後の指導において、もっとキリスト教的要素が取り入れられてもよいのではないか。そのためにも、専任教員として、カウンセラーが各学校に配置されるべきだろう。

その他の課題としては、新島が、社会的圧力をはねのけながら、命がけて京都に創設した同志社であつたが、戦前、戦中の反省をふまえた、キリスト教主義学園としての対社会的責任を果たしているかどうか、という問題がある。（具体的には、即位の礼、大嘗祭において学校としてどういう対応を取つたのか、学習指導要項改訂に伴う、「日の丸」「君が代」義務づけをどうとらえるのか、PKOへの自衛隊海外派兵を、憲法を尊重すべき教育者としてどう考へるのかなど。）さらに、新島が命がけて脱出した歴史を有する同志社なのに、中には留学生受け入れが行われていないという、国際性の遅れをも感じさせられている。「国際化」「国際貢献」という言葉が多用される中で、新島の目指した「国際性」とは何なのか、考察してみる必要がある。これらの課題については、次の機会に譲りたい。

以上の点から、新島は、学力上、生活上の問題を抱えている生徒のことを理解できず切り捨ててしまひやすい「優等生タイプの教育者」ではなく、教育者に最も必要な謙虚さを備え、キリストの心を心として、生徒に愛をもつて接する「生徒の悩みや苦しみを共に分かち合う教育者」だつたと言える。同志社が、この新島の教育理念からかけ離れ、安定化し巨大化した、ただのネームブランドとしての役割しか果たさなくなつてしまつている今、新島生誕百五十年を迎えるにあたり、新島の教育理念を学び直し、現在の同志社教育に活かしていくべきではなからうか。「地図のない激動の時代」の今こそ、新島の教育理念の眞価が発揮される時である。

（コリント人への第一の手紙三章六・七節）  
（ピリピ人の手紙二章三〜五節）

#### 参考文献

井上勝也 「新島襄 人と思想」 晃洋書房

同 「教育者としての新島襄」

月刊チャペルアワー 一八七号

土肥昭夫 「新島襄畢生の想念―横田安止への書簡より―」

同志社時報八十八号

座談会 「同志社の生きる道―進学人口の激減期にそなえて―」

同志社時報八十七号

# 今、できることを

山口良子

(中学校教諭)

今年、一月一日、萩の東光寺を訪れる途中小高い丘に出た。そこは吉田松陰の墓所だった。萩市内を見わたせる場所で、ゆかりの人たちに囲まれた松陰の墓石を見ているうちに、若王子に眠る新島襄を思いうかべた。

京都から離れ、松陰にかかわるいくつかの場所を歩きながら幕末から明治期のこと、同志社創立の頃のことを思った。

## 同志社の学生から中学教師へ

ずっと公立で過ごして入学した同志社大学で、当時の住谷悦治総長が、様々な場所で、新島襄やラーネッドに関して、熱心に話されることを新鮮な気持ちで聴いた。

一九七一年、同志社中学に就職し、数年後、ボストン、アーモスト大学へと旅し、ジョンソンチャペルで新島の肖像と対面した時、住谷総長の言われたことが、すこしわかったように感

じた。その頃、まだ私は同志社中学に期待していた。夢も希望も持って同志社中学の教育に打ち込んでいた。そこには、同志社設立の頃の気風がのこされていたし、入学してくる生徒たちにも大らかさと品格があった。

同志社中学は、個々の教師の教育のしかたをお互いに認め、特に結束もしないが干渉もしない、必要な場合には協力する、校長・教頭、校務主任なども選挙で決められ、先輩も新人も同じ立場で自由に意見が言い合える「民主主義」の場だった。

その頃の、教育実践、学校の組織・機構は、全国的に見ても最先端をいっていたと思えるし、その中で働いている自負心もあった。長時間に及ぶ教職員の討論も迫力があり、深夜になることも多かった。が、充実していた。

何かが変わった

今、できること

この数年、何とも言えない息苦しさを感じる事がある。長期間、同じ場所で働き続けるという閉塞状況からくるものだろうか。教職員一人一人は、ていねいないい仕事をしているのに、全体的にみると上手く進まず各々が精神疲労を感じているように思える。「民主主義」が、ウラ目に出て機能障害を起しているのだろうか。

### 中学生になるのも大変

生徒たちも日本の教育状況の中で追いこまれ、同志社中学特有の欲求不満を、様々な形で表すこともある。年々、激しくなる中学受験、「公立へ行くと悪い人になるから」と私学へ来た中学生は、ペーパーテストの超エリート。同志社中学生は、同志社中学専門の塾が研究し尽して合格させた生徒たちの集団へと変わりつつある。中には、小学一年生から、全生活を綿密なスケジュールで大人に管理されて勉強し、自分で好きなことを自由にさせてもらえなかったケースもみられる。

新島の教えやキリスト教主義は忘れられ、「こわい」公立中学からのがれ、偏差値の高くなった同志社大学へ、そのまま入るための中学になってきている。

### 同志社だからこそ

これは何も同志社に限らず日本中の教育現場に見られること

かもしれないが、そうであれば、なおさら、同志社だからこそできることを、思いきって試みる必要がある。私の思う同志社の良さは、国際的な活動とすぐれた社会事業の実績をつみ重ねてきたことにある。

将来、これらの良さにつながり得るような同志社中学生の取り組みをいくつか紹介したい。

### 同志社中学生が試みたこと

#### ① ライフ・リンクのとりにくみ

「ライフ・リンク」とは「命の輪」という意味で、人類の未来について影響を与える若者が、地球人類の平和な未来について話し合い世界中にフレンドシップ・スクールのネットワークをつくっていくこうとする組織で本部はスウェーデンのウプサラにある。核戦争防止の国際医師の会のハンス・レヴァンデル氏が議長。数年前ハンス議長が同志社中学を訪れたことがきっかけとなり、生徒たちは、平和や環境問題を訴える人文字をついたり、四〇〇通のピース・メッセージを二十数カ国に送るなどの行動をした。今も手紙の交流は続けられている。

#### ② ニュージーランド生との交流

昨春ニュージーランドのヘイスティングス校中高生二十五人が五日間、学校訪問し、授業、クラブ、生徒会との交流などで、活気にあふれた時をすごした。英語を学び初めて約一年の中学

二年生でも、積極的に話しかけ、生きた交流の場となった。

③ エネルギーゲーム

昨年十一月一日の人権行事の日、一年生では学年の取り組みとして、エネルギーゲームをした。これは年間を通して「アジアを知ろう」を学年テーマに様々なことを体得してもらおう試みの中の一つで、一クラス四十人を世界の八つの地域にわけて五人一組のグループをつくり世界にエネルギーが一〇〇あるとしたらどのようにわけるか話し合う国際会議のシミュレーションである。各グループは、担当の地域・国の様子を事前に調べておいて、その国の代表となつてエネルギーを取り合い、各国の実情に合わせて十分な話し合いで比率をきめていく。そして話し合いで決まった比率と現実の比率のギャップを実際に感じとってもらうゲームとなつている。この日、生徒たちは、二時間以上、自力で話し合い、その結果、現実にある世界の中の不公平さを心からおかしいと感じていた。

地球的規模で生きることを

地球そのものの存在が危なくなりつつある今、世界の中のアジア、アジアの中の日本の存在のしかたを学ぶカリキュラムをつくっていくとともにグローバルを考え、自分の住む地につきり足をつけ、活躍してくれる青年を育てるため、語学トレーニングに関しては次のようなことが考えられないだろうか。

同志社英学校として始まった同志社の特性を生かして、

1. 中学からの集中的な少人数語学教育、
  2. 英語だけでなく、もう一カ国語を、
  3. オール同志社の英語センター的なもの、
- さらに言うなら国際教育研究所的なもの設立、などをぜひ提案したい。

公立中学でも、海外の学校との交換プログラムが、学校として実施されているという。

「中学レベルでは、ちよつと」との危惧から、昨春はニュージーランドの中高生の数日間の同志社中学生の家庭へのホームステイも、実現できず、他校の知り合いから不思議がられた。

鎖国していた日本を脱出して、アメリカ東部で単身学び、帰国後、閉鎖的な日本・京都の中で、あらゆる苦難を乗り越えて、「良心を手腕に運用する」ことのできる青年を育てるために同志社を創ろうとした新島を思いおこすとき、「その気になればかなりのことができる」今、「その気」になつて、思いきつた教育をしていくことが求められているのではないか。

同志社ファミリーは、内部でかたまり、閉鎖的だと見られがちである。もしそうであるなら、内部にこもらないでもつと外へむかうことが大切ではないか。

一方、卒業生からの手紙などで、同志社から遠く離れた世界各地で、しっかりと活躍している人たちが多く存在していることも、私は知っている。

日本中にはびこる偏差値「万能教育」に抗して、新島の目指したものを、現代に生かし、世界に目をむけて生きる青年を育てる

とともに、「いと小さき者」を見捨てず、大切にすることこそ今求められているのではないだろうか。

# キリスト教「主義」教育と聖書「科」

山本有紀

(中学校嘱託講師・同志社教会副牧師)

同志社英学校の発足当初の様々な「苦労話」の中に、教科教育としての「聖書」の、同志社教育における位置付けに関わる一連の問題があったことは周知のことである。即ち、学校内では一切キリスト教の「講義」をしてはならないという文部省側の通達に従うという念書を取られ、毎月一回という頻度で京都府学務課の査察が入り一々授業内容をチェックされ、結局学外に新島が私費で場所——いわゆる「三十番教室」を確保して勉強会を行い(正式な授業としては扱えなかった、カリキュラム上は「修身学」の一部に組み入れ「修身学・講説」と記して聖書「科」の授業を行わなければならなかった、という出来事である。学校の主宰者としての新島にとっては、こうした現実と宣教師たちの激しい抗議——全く随意の集会や、国家神道的な「修身学」の一部としての聖書「科」の位置付けに対する批判——

の板挟みになって苦しんだであろうことは想像に難くない。私はいわゆる「新島研究」は素人であるが、「新島襄全集」第一巻中、一、二、三、五、六、の資料の中からこの辺りの事情を察するに、新島自身も全く随意の集会としての聖書の講義後の第二公会となる集会のみといった形は本来の希望ではなかっただろうし、もとより単なる「修身学」の一部という位置付けは全く不本意であったものと考ええる。例えば、前掲の資料のうち(「全集」一巻一三一―一四頁)に収められた「デイヴィスの講義に關して府知事への弁明」の中の二つの文章を見てみたい。この弁明は府の学務課の査察の際、デイヴィスが正課の「修身」の授業でキリスト教について講義をした、と指摘されたことに対するものである。二通同名の文書が存在するのは、年譜と照合すれば、「始末書」は書き直しを促され作り直したとあり、原案

の前者と正式提出の後者の二つがあつたことがわかる。二通を比較すると、後者の「始末書」の文面は前者のそれに比べれば非常に当たり障りのない文章に改められている。ここで注目すべきは、書き直しによつて削除されていった文章が、「同志社において教授する『修身』徳育はそもそもキリスト教とその思想信条抜きにしては語れない」といった主旨のものであり、後に「同志社大学設立の旨意」に成文化された精神と同質の理念を綴つた部分であつたという点である。

新島にとつては同志社の徳育は徹頭徹尾「一ノ其教戒(キリスト教の教えニヨラザルハナシ)」「始末書より引用)なのであり、この際はどのような手段を講じても、明治の維新政府の中に根強くあつたキリスト教への偏見・警戒心から発する様々な抑圧、また特に私立学校雇入れの外国人教師に対する差別的な扱いをなんとかかい潜つて学生に理想の「徳育」を施そうとする熱意がこれら二つの「始末書」からは滲み出ているように思う。実際、「書き直した」ことが一層この事実を裏付ける。理想を貫こうとしながらも、事業の責任者―外国人教師の雇い主、また同僚の伝道者として、学校と、海を渡つてやつて来た宣教師たちを社会的に、そして法的に守つて行かねばならない責任者として新島は「始末書」をどんな思いで書き直したのだろうか。そして、私が注目するのは、こうしてまで新島が守ろうとした同志社の徳育＝キリスト教／聖書という「講義科目」とはいったい何だったかということである。

新島はデイヴィスに「修身」を任せ、そして自らも「三十番

教室」で聖書を講じた。確かに自宅でも集会をもつたが、何より新島はカリキュラムに「聖書」を組み入れることに幾度となく挑戦している。そして、聖書(キリスト教)を専門に講義、教授できる正式な資格をもつ教師を常に求めていた。新島は、様々な欧米の学問の一つ一つと並んで「聖書」あるいは「キリスト教」をも同様に正式な教科として同志社の教育の体系の中に位置付けようとしていたとは言えないだろうか。もしそうでなかったのなら、信仰の養いの場としての主日の礼拝＝教会だけがあればよかつた筈である。しかし実際は、修めるべき「学科」としての聖書／キリスト教「科」にも新島はこだわつた。同志社の教育の体系の中にきちんと位置を占める「徳育」の在り方にこだわつたのだ。

これから考えると現在の同志社諸学校の聖書科あるいはキリスト教科はどのように経営されているだろうか。私は現在同志社中学校で聖書を担当して二年目になる。特に中学校という義務教育機関での「聖書科」を考える場合、政府・文部省の要求と学校の教育方針という二重映しの構造が存在し、ある意味で創立当初の状況に似ている。

現在の文部省の中学校指導要領に基づけば「聖書科」の扱いは、公立学校における「道徳」の代替科目ということになってしまふ。確かに「人格の形成」という点においてはそれで充分の感もある。しかし、ここで注意すべきは、公立学校における「道徳」は一教科としては位置付けられていないということである。クラス担任の教員が、その専門性に関りなく、ホームル

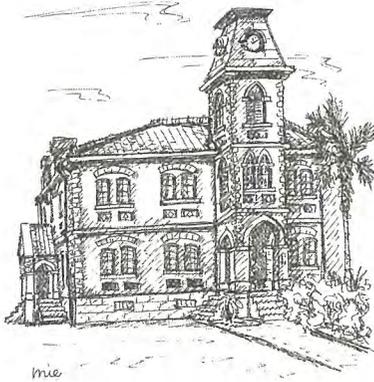
「ム指導の一環として行うものなのである。学校によっては「学級活動」などと呼ぶところもあるくらいである。そして、こうなれば当然いわゆる「評価」は成されない。実際には「道徳編」という指導書があり（筆者も持っている）モデルのカリキュラムや指導案も出版され、体系化された「道徳教育」はあるにはあるが、日本の教育の現場では、「道徳教育」は教育職員の資格（いわゆる教職免許）を取らうとする場合「一般教養」的な位置付しなく、当然「道徳教育」を専門にするような教員は存在しない。

振り返って同志社の中高ではどうかであろうか。「宗教科」という免許をもった「専門」の教員集団が存在し、「聖書科」という一つの教科として授業を行い、生徒に対して一定の評価を成す。勿論聖書の授業だけが「徳育」の現場ではない。むしろ、学校の生活全体を通して行われていると言つてよい。（それが理想である。）ならば教科として、「宗教科」の免許をもち、他教科がそうであるように「それを教えることが専門」とされる教員（非常勤であっても）が担当する「授業」としての「聖書の時間」に現在一体どのような位置付けができるであろうか。本当に文部省の言う「道徳」の代替科目でいいのだろうか。

私は、現在この点について「教科として評価を出す」現実から出発することになっている。評価を出すからには達成目標を掲げ、評価基準を定めて行かなければならない。授業計画も要るし、教案も立てなければならぬ。そういう「授業」を作つて行くのに必要な要素を満たすことのできる授業を目指している。

「イエスキリストはこう仰言つたのよ。わかつた？」という調子ではこの目標は達成できない。初めて聖書と向き合わせられる生徒に対して「信じる／信じない」の次元を越えて、この「難物」にどう取り組むか、いかに面白く、しかし正しく理解してゆくか。歴史として、或いは物語としてどう分析し、どうメッセージを自分の力で取り出すか。そういう「基礎体力」を獲得することを目標に、願わくはその知識と技術の助けを借りて、「核心」に自ら出会うべくすれば、と考えている。

さて、新島はどの様に考えていたのであるか。ぜひ聞いてみたい、そんな気がする。



# 君よ一時学業のならざるを以て生涯事業を語る勿れ

大山 綱 夫

(恵泉女学園短期大学学長)

若いころは、実力は不足し教育に不慣れではあったが、構えずとも学生のなかへ入り、語り合うことができた。学生と気を通じ合わせることでできた。しかし、年を重ね、実力の蓄積はともかく、教育に慣れてくると、いつの間にか学生と私との間には、世代文化の壁が出現していた。私の努力は、しばしばこの壁にはじき返された。学生が挫折するとき、私は別の意味での挫折を味わうことがあった。とりわけ現代を病む若者には、接近すらできないことがしばしばあった。残念ながら、これが教師としての私の現実である。ロック歌手尾崎豊の死に、私は改めてこの感を強くした。

昨年四月の尾崎豊の死は、その数日後の葬儀の続報に接しなければ、私にとっては他の芸能人の死と大して変らないニュースであった。しかし、その日冷雨のなか約四万もの若者が葬儀に集まった。テレビの画面は、延々と続く傘の列や、傘もささずに涙ぐみ、あるいは号泣している若者たちを映し出していた。

聞けば私の学生のなかにも、彼にひかれている者がかなりいた。私は急に気になり出した。尾崎豊？ 彼の存在は、広告や新聞・雑誌記事を通して活字では知っていたが、彼が私の世界へ入ってくることはなかった。ただ二回だけ、彼の名を気に止めたことがあった。一回は、テレビ・ドラマ『北の国から 87 初恋』のラスト・シーンのなかである。東京の高校へ旅立つ主人公の純が、尾崎の『I love you』を、好意で乗せてもらった長距離トラックのなかで聞くのである。テープもウォークマンも、一家逃散で行方の分からなくなってしまう初恋の少女からのクリスマス・プレゼントであり、同時に別れのプレゼントでもあった。印象的なシーンであり、痛切な音楽として記憶に残った。尾崎豊の名と彼の音楽が結びついたのは、このときだけである。二回目は、そのころ、若い同僚のひとり、大学礼拝での話を終えて戻ってきた私に、「先生の触れられた問題についてなら、尾崎豊の世界が参考になりますよ」と助言してくれたときであ

る。礼拝で私は、現代の教育の問題や若者像について語つたのである。無理をしても彼の音楽を聞いてみよう、そのときは思った。しかし、もっぱらクラシック音楽ばかりを聴いていた私は、なかなかロックへ関心を向けることができないでいた。そして彼の死のニュースである。

私は『朝日ジャーナル』のバックナンバーを取り出した。尾崎豊と筑紫哲也の対談を思い出したからである。これを再読してはじめて尾崎豊という存在と彼の音楽が、なぜある若者たちにとつて意味があるのかが見えてくるように思えた。そこには、現代という病いを病み、悩み、希望のありかを見つけようとして、それを体当りで音楽という媒体にぶつけ、表現しようとしているひとりの若者の姿があつた。そのことが、似た病いを病み、悩み、苦しい模索を繰り返していた若者たちをとらえたのだから。対談は一九八五年、彼が二十歳のときである。彼は、小学校六年生のとき転校先でいじめに遭い、登校拒否となり、家にもつて、井上陽水を夢みてギターにのめり込む。進学した中学・高校では、大人は子供を洗脳しようとしているのだと、教師と衝突する。学校を休み、非行と分類されるような生活を送りながらも、高校三年間は学級委員をつとめる。というようりは学級委員をさせられる。同級生たちは、教師と真正面に向かい合い発言する彼を、自分たちの代弁者として選び続けたのである。しかし、彼は卒業を目前に中退する。管理主義的発想の大人から見れば、ひとりの非行少年・学校不適応生徒の退学である。しかし、次のような発言を読むとき、人の内面を窺うこ

との困難を痛感させられ、世の管理主義的発想の貧困を衝かれる。彼は、「苦しむ者は救われると信じていた」という。「僕の願ひの中には一度でいいから、全人類がほほえむ瞬間というものを見てみたいというのがあつて、そうしたら、その瞬間世界は変わるんじゃないかと、そんな気がしているんです」とも言う。これを読んでいるとき、彼の激しい音楽が痛々しさを伴つて、私の脳裡を流れた。『尾崎豊詩集』に収められた詩は、専門家の眼からすれば完成度が低いかも知れない。しかし、苦しさそれを表現し切れないもどかさや呻きのようなものが、私には伝わつてきた。希望のありかはどこなのか、出口はあるのか、と。

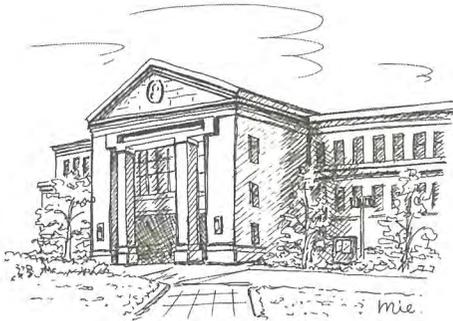
もちろん尾崎豊が、現代の若者のすべてを代弁していた存在だとはいえない。彼の音楽のメッセージではなく、メロディーにひかれてくる者たちもいよう。キャンパスや職場には笑顔と歓声が満ちているという人もいる。しかし、四万という数、そして思いがありながら来られなかったであろう数を考えると、私の気がかりは消えない。彼らは、散つて行けばキャンパスや職場のなかの少数者であるかも知れないし、どこかに偏在するのかも知れない。しかし、キャンパスに限って誤解を恐れずにいえば、笑顔と歓声の溢れるキャンパスは、偏差値競争の勝ち組のキャンパスである。それは、負け組のキャンパスと比較すれば歴然とする。かつて旺文社がほぼ唯一の受験情報企業だった時代と、偏差値と共通一次試験の登場以降の時代とは、全く異質である。偏差値の全国規模の普及と、歴代の文教政策の成

果(？)たる管理主義の徹底のなかで、身動きがとれず、病み、挫折する若者が現われるのは当然だろう。文化モデルを失った現代日本社会は、学力偏差値以外にも、得点をあげるコースのあることを提示できないでいる。病原菌の蔓延は、勝ち組、負け組を問わない。坑道のなかのカナリアのように、感じやすい者が最初に倒れる。

私は、世代文化の壁を乗り越える自信があるなどとは到底いえないが、若い魂への責任を感じ、祈りを持つ。私の研究室の壁には、短文を書いた紙片が何枚か貼つてある。表題の新島襄の言葉を書きつけた紙は、すでに黄変しているが、何度かこの短言に頼つたことがあつた。「君よ一時学業のならざるを以て生涯事業を語る勿れ 君にして爾後沈思熟慮の四字を以て忘るなくんば余に於て幸甚」解きがたい問題をかかえて去つて行く学生が、毎年出る。現代特有の問題もあれば、昔と同じ問題もある。その度に、私は聖書のいくつかの言葉と共に、この言葉を書いて起こしていた。「あなたがたは、これらの小さい者のひとりをも軽んじないように、気をつけなさい」(マタイによる福音書十八章十節)、「これらの小さい者のひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではない」(同十四章) これらは新島の祈りでもあつたであろう。

明確な建学の精神を持つ私学が、拡大化と共に、その精神を失つて行く姿はいくらでもある。加えて、私学の冬の時代が目前という現在、「サバイバル競争」勝ち抜きのための施策が、建学の精神を押しつけているようなところもある。大学レベルで

は、自己点検・自己評価が流行現象であるが、そこには偏差値勝ち組への志向が、美文の背後に見え隠れする。学校は残るとしても若者はどうなるのだろうか。キリスト教学校教育者であつた新島は、その中で挫折するひとりにも心を砕いた。新島なら、現在何を語るであろうか。表題の短文がいまも私を見詰めてい



# 学問の府と伝道活動

佐伯 幸雄

(日本基督教団  
同志社教会牧師)

一九七〇年を頂点とする大学紛争の出来事は、キリスト教界にも大きな影響を及ぼし、教会の宣教の在り方にするどい問いを投げかけ、今日に至るも未だ、その課題を負って苦悩の歩みを続けている。このことは、学園内のキリスト教教育活動にも深い関わりと影響を与えてきた。

従来、キリスト教主義をもって立つ学校は当然のこととして、礼拝を中心にして、宗教活動を展開して来たし、車の両輪のように、学校内に教会が存在していた。しかし、一九七〇年を前後して、学内にあった教会は、学校と完全に分離し、学内からその姿を消していった。

これに対して、同志社教会は現在もなお女子部栄光館フアウラーチャペルを借用して礼拝を続けている。その根底には、同志社教会が学園教会としての使命と責任を果たさねばならないという創立以来の精神がそこに働いていたし、今日もなおこのことを大切にしていることによる。

一八八六(明治一九)年六月二五日、同志社礼拝堂の竣工が行われた年の一〇月八日、西京第二公会(教会)員中、同志社に關係ある者は同志社構内に移り、新装なったチャペルを礼拝堂として教会規約を制定して「同志社教会」を組織し、新島襄を再び仮牧師(宣教師の身分であったので)として迎え、新しい出発をしているのである。

その教会規約には、第一条に、学校内に教会を設置すること、第三条に、会員は同志社社員、教員及びその家族、並びに生徒に限ること、とあり、但し、傍聴者は制限なきこと(第八条)とある。今にしてみれば問題を感じるが、これは後に改善されているので、そのままを記しておこう。

一九〇五(明治三八)年一月二四日開かれた教会總會では、同志社と同志社教会との關係の明確化を議して、わが同志社教会と学校との關係は頗る明確を欠くこと教年なりしが、今回、わが教会を学校教会とし、学校当局者は直接に教会の経営に責

任を負うものとし、ただちに、教会経営を現任校長丹羽清次郎氏に一任する。」としている。

以後、一九二一（大正一〇）年一月四日に改正された規約では、第二条に、本教会は本教会の趣旨を遵守する者を以て組織す、とあり、そのわく組みを学園内外に広げる改善が行われている。また第三条には、本教会は同志社をして、神の国建設の使命を実現せしめんことを期す、とあり、教会存立の目的を学園伝道に置いている。

一九三〇年代に入つて軍国主義、皇民化教育の締めつけの中、キリスト教会とキリスト教主義学校は弾圧に見舞われるが、先輩諸氏の必死の祈りと忍耐によって、キリスト教精神の灯は消されることなく戦後の隆盛期に引きつがれている。

当時、クラーク館のチャペルで礼拝をしていたが、会衆の増加に伴い狭くなったので一九四六年五月二六日から場所を栄光館ファウラーチャペルに移した、とある。なぜ、元来の同志社礼拝堂に戻らないで栄光館に移したのか、の疑問は残るが、施設設備の完備と当時わが国では有数のパイプオルガンが設置されていたことによるのだろう、と想像する。

時代の変遷と共に学内事情も変つて来た。伝道という言葉の醸し出す活動は衰退して、文化学術的な内容のキリスト教が多勢を占める傾向をもつようになつた。また一九五三年六月、宗教学法人法の施行により、同志社教会は、「宗教学法人、日本基督教団同志社教会」となるに及んで、学校法人とは相對する別法人になつた。従つて、徐々に教会は学校の外部団体と位置づくよ

うになり、学園の伝道に対して手の届かないところへ追いやられたような格好になつた。

このことは、一九七〇年の学園紛争以来一層顕著になり、学内伝道に対しては取り付く島のない様な状態になつたように思われる。また、同志社の田辺校地移転に伴い、大学一・二回生と女子大生の不在は、伝道にとつて大きなマイナスとも思えた。

この様な実状の中で、一九八三年一月三十一日の大学広報臨時二一三号では、宗教学教育に対する答申案が出され、その中に「また、同志社教会は単なる市中教会にとどまらず、学園内宣教の使命をも有していた歴史を省み、大学との交流と協力を密にすることが望ましい」との文言を見て、教会が今日もなお学園教会として学内伝道の使命をもち続けていることの意味と可能性に希望をつなぐ思いだつた。

このことは、その後しばらく消息がなかつたが、一九九二年一月二日大学広報臨時三六五号で「キリスト教主義教育に関わる将来構想についての答申（報告）」が出され、続く一月二二日大学広報臨時三七二号で「キリスト教文化センターの設置案」が出され、キリスト教教育の推進を積極的に進めていこうとする大学の姿勢を思うて、大いに勇気づけられる思いがしている。しかし、伝道活動は必ずしも大学の課題ではないとすれば、宗教学活動としての伝道の課題は教会がその責任を負わなければならないと思う。

同志社教会が学園に対して協力を求める立場にないことは承知している。しかし、過去の歴史をふり返つてみると、学園と

教会とは互いに力を合わせて、同志社のキリスト教精神の高揚の実をあげて来たことを思う。

そして、今日の事情の中でも学内に向けて伝道活動の展開ができる日の来ることを願う待望している。

今までも、消極的ではあるが、学校法人同志社との間では、創立記念日礼拝や今回の新島生誕一五〇年記念礼拝など、時期をえて共催して礼拝を守って来た。しかし、今もなお同志社教会の伝道の対象が学園内に向けられているとすれば、私たちは学内で伝道活動が可能となることを切望する。

今後、キリスト教文化センターの設置とそれに伴う活動がどのように展開されていくかは知らない。しかし、その活動の中に学園内伝道が加えられ、その責任の一端を教会が負うことが出来ればと、その時期の来ることを切望し、祈るものである。

新島襄は教育者であった。しかし、それにも増して伝道者であった。久永省一氏は「同志社教会の誕生」という一文の中で次のように記しておられる。

米國ラトランドでの新島の演説が大学設立のための募金が主旨であったがために、同志社では教会よりも大学、宗教よりも教育の方が一貫して前方に押し出されて来ている。しかし、新島にとつては、この「自由教育、自治教育」の言葉に示されているように、教育と教会はどちらが先行するのでもなく、両者並立して存在していたのである。それどころか、新島が東北から九州迄、殆んど日本全土を宣教

のために踏み歩いたことを思えば、牧師としての新島が教育者としての彼より先行するのではないかとさえ思われる。」「新島襄と同志社教会」二五〇頁

この文章が示すように新島の教育理念の背後には必ずキリスト教精神による人格の養成があったのであり、このことは今日も尚、私たちが荷負うべき課題であり、新しい時代への適応の中で行われる伝道の在り方を求めつつ新島の目ざした理想を継承していくのでありたいと思う。



かつて同志社が創立六〇周年（一九三五年）を迎えたとき、『我等ノ同志社』（校友同窓会報）第一〇〇号を同志社と共同で発行し、題した特大サイズの部厚い記念号が出版された。表紙は梅花を近景に、クラーク館を斜め下からアップで撮ったものであったと記憶している。現在手許で確かめることが出来ないが、私が一九四四年、大学予科に入学したころには寮の書架に数冊あって、同志社にアイデンティティーを求めていた私は貧りよんだ記憶がある。巻頭のグラビアは新島襄の生涯を彩る写真、板垣退助らにあてた書簡、創立年度のオンボロ学舎から当時のキャンパスの情景などであって、寄稿欄には徳富蘇峰、深井英五、内田康哉、山室軍平ら、当時の言論界、財界、政界、宗教界の一線で活躍する存命の先輩たちが名をつらね、記事としては各ミカルな文体で紹介されていて、これに当時の学生風俗などの写真、イラストの豊富な駆使を加えると総じて大変に面白かつ

## 同志社文化の再生を

高道基

（岐阜済美学院院长・  
中部女子短期大学学長）

た。巻末の小説は浜本浩であったことさえ覚えていて。

しかし特に興味を覚えたのは同志社キャンパスの未来図（創立百年を想定してイラストされたもの）が二頁総面にわたって描かれていて、私の目をうばったのは、その大胆な構想であった。記憶によれば、現在の今出川校地は高層のビルで囲まれ、キャンパス中央の放送局の塔がたえず電波を発信し、それをレシーバーや画像でうけて講義をきいている学生の姿や、それを屋上に発着するヘリコプターまでが描きこまれていた。しかし当時の神学館（現在のクラーク館）だけは少しも変更されず現在地にえがかれていたのを見て、一寸驚ろいたところを考えると、当時の学生たちにとっては「変わるべきもの」と「変わるべからざるもの」の区別は載然と弁えられていたように思う。日中戦争はそろそろ泥沼化の様相を呈していて、国体明徴の掛け声のもとに日本はファッション化への道を急速に進んでいる中で、オーケストラを含め、全同志社の男女学生によってもたれた「メ

サイア」の写真と記事がひどく私をひきつけたが、男性は殆ど一頃流行のオール・バック、女性はあるやかな和服姿で、全く戦時色はなく、ひとときわ同志社リベラリズムの香り高いものであった。

私が記憶を辿りながら以上のことを書き連ねてきたことは、ちようど創立六〇年のころが、スポーツを含め「同志社文化」と言えるものの絶頂期ではなかったかと思うからである。この時より数年遅れて旧制予科に入学した私には、同志社文化を実感できるゆとりは全くなかった。入学して最初に読んだ黒板の文字が「古賀峯一司令長官戦死」だったのだから無理もあるまい。当時は受験のための機会は二回ほどしか与えられず、競争率は高かったが入学生は多く旧制高校の不合格者だったから、どこことなく落魄した雰囲気であった。又、それだけに同志社にアイデンティティを求める気持が強かったとも言える。しかし戦争はその機会を与えなかった。新島を語るときその生涯のキーワードである「自由」は最大の禁句であったから。

そのことはさておき、戦後メガロポリスに集中する大学志願者を背景に、巨大化への道を辿った同志社は次第に難関校となり、地方の新制大学となったかつてのナンバー・スクールを凌ぐ勢いを示めていることはうれしいことには違いないけれど、これも「同・立・関・関」と併称されるフレームの中の現象であって、「同志社だから、それだから」といった志願者は戦前に較べて果たして増加しているのかどうか。

私はやはり同志社文化の再生を、血の通い合った共同の文化

理念の復興をと願ってやまない。そのためには同志社建学の理念の再確認なくして将来の展望は開かれてこないと思っている。この点についてごく最近、筆者が所感を寄せた「キリスト教学校教育」(一九九二年十一月二十五日発行)の一文を再録することをお許しいただきたい。

就学人口の激減期を迎え、学校間「サバイバル競争」とか、「自然淘汰」という言葉がキリスト教主義学校の中でさえ行きかうのを聞くと淋しい。

勿論今後の学校運営のきびしさは知悉しているが、かつて初代の東大総理加藤弘之がソーシャル・ダーウィニズムに基づいて「優勝劣敗、適者生存」を説き、自らの天賦人種の立場をくつがえして国権論に転じた時の用語法に類似しているように思える。それは今日と同じ歴史の枠組みであると言うつもりはないが、「自然淘汰」は「適者生存」に連ながり、その言葉が先行すれば、人権という教育の基本的視座がせまらるるよう思えてくる。

大学では現在、設置基準の大綱化にともない、自己点検・自己評価の作業が進められている。大学基準協会のマニュアルには、国公立を問わず「建学の理念」の自己展開というのが前提とされているが、このことは自明のことのようであっても実は余りそうではない。簡単に「寄付行為」の目的条項にキリスト教がうたっていることではすまされず、その活性化情況が問われているのだ。

世俗化された多くのキリスト教主義学校では、「建学の理念」という高尚な(?)ことがらは学長や宗教委員会の肩にあずけっぱなし、チャペルへの参画を求めても馬耳東風というありさまで、これでは自浄作用をもつ教育共同体という名がすすり泣く。かつてベルシヤ王キュロスのバビロン攻撃にあたり、栄華をきわめたころのバビロンの人々は、「サバイバル」のために神殿からベル、ネボと呼ばれた偶像を持ち出し、これを獣や家畜の背中に乗せて都を逃れ出た(イザヤ書四六章)。

しかしその偶像はバビロンの民を救わず、彼らはその重荷に疲れ果てた。ベル、ネボは「据えつけられればそれは立つが、そこから動くことは出来ない。それに助けを求めて叫んでも答えず、悩みから救ってはくれない」(新共同訳)。

このことは皮肉にも「建学の理念」をひたすら偶像のように肩にかついでいる私たちのあり様に似ている。

バビロンの陥落にあたって捕囚の民イスラエルの人びとに向かって第二イザヤは次ぎの言葉を神から預る。

わたしに聞け、ヤコブの家よ、イスラエルの残りの者よ、共に。

あなたたちは生まれた時から負われ、胎を出た時から担われてきた。

同じように、わたしはあなたたちの老いる日まで、白髪となるまで背負って行こう。わたしはあなたを造った故、わたしが担い、救い出す

思えば初期、キリスト教教育を目指した私たちの先達たちは、ひとしく神に担われた人たちであった。このことの想起は、今まさにバビロン状況にあえぐキリスト教主義学校の希望の泉源である。学校史とは、役職についてからあわてて読む類いのものではない。それこそ最初の自己点検である。ヤコブの家も、イスラエルの残りの者も、共に。



# 時代を越えた大学教育の問題点

梁瀬 健

(大阪教育大学教授)

漢字 明治の御一新に当たり、明治新政府の指導的思想は、五箇条の御誓文に基づいていることは勿論であるが、教育方針は皇道主義をその基本としていた。これは皇学所の規則中に「国体を弁じ、名分を正すべき事」、「漢土西洋の学は共に皇道の羽翼たる事」などの事項があることから明白である。更に、明治二年二月の「府県施政順序」の中に「専ら書学素読算術を習わしめ、願書、書翰、記牒、算勘等その用を闕さらしむべし。又、時々講談を以て国体時勢を弁え、忠孝の道を知るべきよう教諭し、風俗を敦くするを要す」とあり、ここに於いても皇道精神の具現を認めるのである。即ち、これは明治維新をなしたげた王政復古精神である。この復古的精神こそ、皇道主義として教育上大きな意味をもつものである。

一方民間に於いては、人々の西洋文明に対する探究心をはつきり認めることができる。これまでの鎖国政策が廃せられるにおよび、公然と西洋文明の新知識を求めようとする力がおこる

のは当然で、これは五箇条の御誓文に明示された「智識を世界に求める」という、明治政府の大方針にそうものであった。当時、民間に設立された私塾の主なもの、福沢諭吉の慶応義塾、鳴門二郎吉の鳴門塾、尺振八の共立学舎、箕作秋坪の三又学舎、福地源一郎の共懐義塾などであったが、いずれも西洋新知識供給の場所であり、又、新文明紹介の機関でもあったのである。それは福沢諭吉の「学問のすすめ」にも見る如く、「漢学者や国学者の説く、「実に遠く、日用に間に合わない古典の研究」ではなく、「普通の生活に応用できる実学」を求めるやりかたであった。即ち、万人平等の思想と共に、アメリカ流の功利主義的思想であつて、新政府の教育方針であつた皇道主義とは相容れないものであつた。明治新政府の復古的皇道主義に対し、民間塾の思想はむしろ革新的、主知主義的、実利主義的であつたがために、一般に容易に受け入れられたと云えよう。即ち、その目的とするところは、鎖国のためにおくれている我国を、欧米先

進国の文明に一刻も早く浴させようとするのであった。

明治新政府はこの思想をも入れて、新時代にふさわしい教育制度として打ち出したものが、明治五年八月の「学制」の公布である。その冒頭にある次の一文は、まさに福沢諭吉の「学問のすすめ」の思想と一致するものである。「人々自らその身を立て、その産を治め、その業を昌んにして、以てその生を遂るゆえんのものとは他なし。身を脩め智を開き、才芸を長ずるによるなり。而してその身を脩め智を開き、才芸を長ずるは、学にあざれば能わず。是れ学校の設けあるゆえんにして、日用常行言語書算を初め、士官農商百工技芸及び法律政治天文医療に至る迄、凡そ人の営むところの事、学あらざるはなし。……されば学問は身を立てるの財本とも云うべきものにして、人たるもの誰か学ばずして可ならんや」と。

明治五年八月の「学制」は、このように主知主義的、実利主義的色彩が濃いと云えるが、同時に又、中央集権的な組織のもとにあまねく教育の恵みを享受できるといふ啓蒙的な意味を多分にもっているのである。又、外遊者もたらした欧米の思想には、功利主義的思想(アメリカ流)、自由主義的思想(フランス流)に加え、ドイツ流の国家主義的思想があった。前二者は比較的受け入れやすかったが、国家主義的思想はおくれて明治二十年以降に隆盛を来したのである。最も普遍的に広まったのは功利主義的思想であった。国家よりも個人の利害を主として考え、まず個人の立身出世を等一義とし、そのためにはまず知識人でなければならぬとする考え方である。これには西洋の

模倣と、真理とされるものへの追従という二つの面がある。いざれも欧化主義の運動ではあるが、まず盲目的な泰西文化の模倣からはじまったことは時の勢いである。福沢諭吉の云う「文明は外見に見られる事物と、内に存する精神の二様の区別あり。外の文明はこれを取るに易く、内の文明はこれを求むるに難し」に示される通りである。内なる精神的文明開化は、結局は知識人によってなされたものである。この人達によって自然科学的理法、資本主義的社会組織を学びとり、資本主義発展の土台を築いたことになる。

明治十二年九月、文部省は先の「学制」を廃止し、新たに「教育令」を制定した。即ち、これは田中不二麿を中心としてつくられたもので、「学制」の干渉的、画一的な面を除き、アメリカ的な自由主義思想の濃いものであった。その翌年十二月、更に第二の「教育令」が發布されたが、これが世に云う「改正教育令」である。時の文部卿河野敏謙より元老院に出された上申書に見られる次の一文より、この「教育令」が自由放任主義を斥けて、再び干渉主義に戻されたことを知り得る。「その政体の如何に閑せず、苟くも文明を以て称せられる国にして、普通教育の干渉を以て政府の務めとせざるはなし」と。

この時期に明治八年十一月、同志社は新島襄により京都に創設された。これより先明治四年、岩倉大使一行が欧米視察のため渡米した時、新島襄はかの地で随行の文部大丞田中不二麿と会い、日本のこれからの教育について語り合っている。新島襄の教育方針は、「日本政府は、国民の間に道德的知識の普及を計

ることが必要であるが、知識の進歩及び道義、哲学等はいずれも皆有徳なる人物を養成するには十分とは云えない。これに反して、キリスト教は人をして自由・勇敢・有徳ならしめるために力となるものである」ということであり、田中不二麿の云う「すべての宗教はこれを自由に信奉させてはならない。又、聖書は教科書とせず、道徳的糧食として学生にこれを学ばせるがよい」という考え方とは相当の距りがあった。この故か、帰国後の新島襄は森有礼の囑望を斥け、自由な一平民として、キリストの使徒として、キリスト教学校を興したのである。新島襄はこの英学校を大学の位置に引き上げるべく、明治二十三年大磯に客死するまでその資金募集等の努力を続けた。勿論この間も学生の薫陶は怠らなかつたのであるが、前者を重く見て内村鑑三のように新島襄を宗教家というよりは事業家であつたとする見方もある。しかし、新島襄は書簡の人であり、弟子に与えた多くの手紙より新島襄の弟子を思ふ心の広さ、深さを感じることは容易で、我々はこれらの書簡を通じて新島襄の宗教家、教育家としての人格に触れ得るのである。しかし乍ら、学校を隆盛にすればその逆の面として教師と学生との親密さは薄くなる。明治二十二年、横田安止宛の書簡に「学校も機械的の製造場に漸々流れ行くは、生徒の数も増したるより、自然の勢いにして止む能わざる所もこれ有るべく候え共、小生平素の目的は、成る丈法を三章に約し、我が校をして深山大沢の如くになり、小魚も成長せしめ、大魚も自在に発育せしめ、小魚たるも大魚たるもその分に応じ、その身を世に犠牲となし、此の美し

き日本を早晩改良して、主の御国乃ち黄金時代に至らしめん事は、小生の日夜熟祈して止まざる所なり」とある如く、すでに現在の大学教育の最も弱点とするところを突いている。この文にも現れているように、新島襄の教育精神は、博愛を掲げるキリスト教的信仰と、一種の国家主義的な武士精神を兼ね備えていたものと考えられる。しかし、宗教学校はまだよい。一般の普通学校では、第一高等学校のような自由な気の溢れる学校でさえ、まだキリスト教に対しては排他的であつたのである。一高の寮誌「向陵誌」にキリスト教青年会の記事がある。それには明治二十二年、このキリスト教青年会の催す演説会のため、講堂の借与を学校当局に申し出た際、木下広次校長の答は「余は近年まで宗教の効能大なるを知らざりしが、近時人の品行上に及ぼす影響の大なるを知れり。而してその力大なるが故に、校長として責任ある余は、これに関係する能わず」と云つたとある。いづれにせよ、新島襄のキリスト教教育の理念の中には欧米の自由主義的思想と共に、国家主義的思想もかなり濃厚に窺うことができるのである。これは現代社会にも通じているように思われる。ある韓国人の日本人評に、若い人には集団忠誠心は薄いが、社会へ出れば帰属する組織に強い忠誠心を持ち、それが国家への忠誠更には自国中心主義につながるというのがある。即ち、先進国の利己的な面を批判したものである。日本が島国であることが、時代を越えて一種の国家主義的思想を生むと云えようか。

現代大学教育の最大の弱点は、いみじくも新島襄が指摘した

マスプロ的、機械的教育にあると云える。特に一般教養科目では学生が二百人を越えることはザラで、こうなると教授は学生の顔と名前を覚えることが不可能となり、お互いの人格に触れ合うことは、まず皆無になってしまう。これは専門教育になつてもさほど変わるものではなく、特に大学院大学では、学部で学生は殆ど相手にされないという感じになつてしまう。教授と学生の人格的触れ合いの鮮少さは、例えば結婚式に恩師を招かないという現象に現れてくる。人と人との触れ合いは、まず顔を覚え、名前を知ることからはじまる。その意味で出席をとることは無意味ではない。この場合顔と氏名を一致させるために出席をとるのであるから、数は百五十というところが限度と思われる。三年もすれば、お互いに顔も名前も忘れてしまうというのでは本当の教育とは云えない。わかつていてもどうにもならないのが、現代大学教育の問題点である。

